
そしてそれは青春で 2

黒崎ろう

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

そしてそれは青春で2

【Nコード】

N4307V

【作者名】

黒崎ろろ

【あらすじ】

工藤一馬は高校三年生の17歳。どこにでいる青春を貪欲に欲しが
る彼は突如として舞い降りた己の青春の為にひたすらに真っ直ぐ
に突き進みたいのです。って感じの物語が展開されると思います。は
い。

電撃（前書き）

2です。2という名を冠した……。

……。

……。

2です！

電撃

響き渡る読経の声。

俺はまだ17なので人の死やそれを弔う葬儀に参加する経験は豊富とは言えない。

だけど俺は今回この葬式に故人の身内として参加し、俺なりに命の尊さみたいなのを心で感じていた。

工藤一馬^{くどうかずま}。17歳。高校3年生。受験よりも青春をより謳歌したいと日々願っている。そんなどこにでもいる普通の高校生である。

そんな俺がとある週末、ある人の葬式に手伝いとして駆り出された。

その人の名は工藤久蔵^{くどうきうぞう}。俺の祖父である。平たく言うとじいちゃん。

じいちゃんは街で何十年も続く診療所営の院長だった。俺も幼い頃

から何度も世話になった。

そんなじいちゃんが死んだ。享年90歳。つい先日まで元気だったのに、突然病に倒れ、駆け抜けるようにその人生に幕を閉じた。

そのじいちゃんの葬式で俺はじいちゃんの交友関係の広さに驚かされた。

まずひっきりなしに現れる参列者にも驚いたが、その中に街の名士である代議士の方なんかいたりしてそしてじいちゃんへのどう聞いても心からの悔やみの言葉を聞いて、孫としてちよつと誇らしかった。

しかしまあそんな感じの葬式を手伝わされる訳だから、俺達若人は忙しかったらありやしなかった。

じいちゃんの診療所で世話になった事のある友人、三國雄大みくにゆうだいもその若人の一人。色んな物運ばされたり客の相手したりそれはもう目の回る忙しさとはまさにといい感じだった。

そんな忙しさもようやく一段落し、俺と雄大は葬儀場の隅で休憩していた。

「一馬のじいちゃんってすごい人だったんだね」

雄大は紙パックのお茶のストローをくわえたまま言う。

「ああ、俺も今盛大にそれを感じてた」

俺は同じような紙パックの……オレンジジュースを飲んでいた。疲

れた体がビタミンCを欲したのである。

「俺らくらいの年から家族の為に体張って働いて、医者なんつう厄介な職に望んで就いて、拳句は他人の面倒まで喜んで看てたってんだからなんという鉄人って感じだよ。という孫の感想」

「昔の人は強いとかって言うけれどその通りだなんて思うよ」

俺達はふうと息をつく。

「なんかあれだな。こうなるととにかく人生懸けるなにかが欲しくなってくるな」

俺は飲みきったオレンジジュースの紙パックを潰しながら言う。

「どうしたの、突然？」

「だつってさ、うちのじいちゃんは自分の生きたいように生きてきて一生懸命生き抜いたはずなんだよ。それを思うとのんびんだったらと生きてる場合じゃないって気がしてこないか？」

俺は少し熱のこもった、大き目の声で言う。何人かの参列者がこちらを向いたが気にはしない。

「かもね。でもいきなり生きがい見つけろつたってそうそう見つかる物じゃないよ。そもそも見つけようとして見つかる物なの？」

雄大は首を傾げる。

むう。痛いところを突いてきよつた。

確かに今までの俺の人生は確かに楽しかったし17年ながら悔いもない。

しかし、その人生のどこかで何かに一途にがむしゃらに食いついたかと問われれば、即答は避けたいのが現状だ。

「青春だ。俺に青春をもたらしてくれるものはこの世には存在しないのか！」

俺はわざとらしく頭を抱える。というかわざと抱えた。

「いや、探せばあると思うけどね。でもこういうのって一期一会だと思っただよね」

「ほっ」

「それに出会った瞬間にさ、よく言うじゃん。なんか体に電撃が走ったのなんなのって。ああいうインスピレーションでビビビッてくるものがあるんじゃないの？」

雄大はビビビッと、という部分で人差し指を立てながら小刻みに揺らす。なんか卑猥な気がした。

「電撃ねえ。そういう感覚があるなら一度味わってみたいものだけどねえ」

俺は潰した紙パックを捨てる為に近くのゴミ箱へ向かう。

「よいしょ」

紙パックを捨て、さて戻ろうかと視線を前方へ向ける。

ドンガラガラガラガラガッシャーーーーーーンンンン！！！！！！！！！

その瞬間極太の電撃が俺の体を貫いた。

目の前を通りすぎた参列者であろう一人の女性。年は俺と同じくらいかな？

服装は当然喪服。しかし服装のシックでもすれば地味ともいえる雰囲気吹き飛ばすだけの魅力を彼女は持っていた。

茶髪よりも更に色の抜けた髪は見ただけで分かってしまうくらいゆるふわかつさらさらな感じで、くっきりとした端正な顔は凛々しくしかしどこか幼さを残しているようにも見えるそのアンバランスさが俺の顎を貫き脳天を揺らした。

葬儀場で、しかもじいちゃんの葬式で、俺は不謹慎と分かっているつも、探求すべき青春を見つけたことに心躍っていた。

電撃（後書き）

次回、意外な事実が私を待っています。

そう、私をね。

なんのこっちや。

では次回。

姉弟（前書き）

暑い日が続いております。

そういつ時は逆に暑い夏をガンガンに過ごして、

密度の濃い夏にしちやいましょう。

厚い夏にしよう、なんて。

お後はつかえているようで。ではどうぞ。

姉弟

「これはいかんもんが俺の体を駆け抜けたよん！」

俺は興奮冷めやらぬ雰囲気のまま雄大の下へ戻った。

「な、何？ついに変な物口に入れた？」

我が友はとりあえず失礼だ。

「そんなわけあるか！いや、でもこれはある意味それ以上の……」

「……で、何があつたの？」

「え？ああ、あの人を見てくれよ」

俺は物憂げな感じで立っているあの女性を示す。

「あれ？美鈴さんじゃん」

「やあー」

俺の左ストレートが雄大の顔を、

「うお！？危ねえ！何するの！？」

捉えなかった。ちつ。

「なんだお前あの人と知り合いなのかしばくぞ」

「理不尽極まりない理論だね。どうしたらそうなるの?」

雄大はやれやれといった感じの表情で聞いてくる。

「俺はさっき初めてあの人を見た」

「うん」

「なんかこごい感じに心にくるものがあった」

「おお」

「だからあの人に関する情報が欲しい状況でもあった」

「ほうほう」

「だから情報を得る為に俺は手段を選ばん!」

「いや選んで!なんとなくその一足飛びの心情のトレースは分かっ
たから」

俺はそう言われてとりあえず雄大への戦闘の構えを解く。

「では知ってる事を洗いざらい吐きやがれってなもんだ」

「ていうかまあ、知ってる事もなにも……。彼女はかしわきみれい柏木美鈴さん。
年は俺らと同じで、確か最近うちの学校に来たらしい」

「なにいい!?!」

「なんでかは詳しくは分からないけどね。あと分かっていることは彼女には弟がいるくらいかな、ちなみにうちの二年生」

「お、弟とな」

「美鈴さんの事を知っていたのもその弟経由だよ。美鈴さんとはほとんど面識ない」

雄大はふりふりと顔の前で手を振る。

「というよりもそんなにエネルギーッシュに俺に聞いてくるくらいなら直で美鈴さんに挨拶してくればいいのに」

「何を言っている」

「ん？」

「んなもん恥ずかしくて出来るわけないだろうが」

俺は雄大の下へすぐに帰ってきた己のポンピー具合に情けなくなる。

「変なところで純情出ちゃったよ」

雄大はやはり俺に呆れ顔を向けてくるのであった。

結局その時は俺の体に落雷をもたらした柏木美鈴さんには直のコンタクトを取る事は叶わず。俺は家に帰ってきた。

「ううぬ……」

俺は考え込む。さてどうやって美鈴さんに接触するか。

まず思いつくのは弟さんと雄大の間にあるパイプを利用するということ。

……。

あれ？ていうかそれでいいんじゃない？よしそれでいこう。

俺はそう決意を固め、ともかくにも体力を確保しておこうと布団に潜り込み睡眠を貪るのであった。

そしてやってきた憂鬱の象徴月曜日。俺は登校するなり雄大の下へ向かう。まあ同じクラスだから特に距離はないのだがな。

「雄大さんや」

「なに？変な呼ばれ方しちやっただけど」

しかし特に不満そうな顔をしないのが三國クオリティ。

「柏木弟氏に私を引き合わせてはくれぬか」

「柏木弟……。ああ、別にいいけど」

「すまぬな。俺はそこを足がかりに美鈴さんにたどり着く」

「その台詞はとりあえず口に出さない方が良かったかもね」

「そうか、気をつけよう。しかし一晩考えたそのテンションはなかなか抑えられなくてな」

「え！？一晩考えたの？」

雄大から俺へ驚きの眼差し。

「うむ。7時間くらいどんと時間を確保しての長期戦だった」

「そ、そんなにまで……」

「ただ終了が6時間59分くらい早まったのも事実だがな」

俺はふんすと鼻を鳴らす。

「なぜ自信満々なのかは絶対に理解できそうにないよ」

雄大は小さく息をついた。

と、言うわけで放課後。俺は美鈴さんの弟君に会うべく二年生の教室に来ていた。

「変な事言わないようにね」

「任せなさい」

俺と雄大は放課後の開放的な雰囲気に含まれた教室の中に入っていく。

そして、俺は一発で分かった。窓際の席で物憂げに外を眺めるのが絵になる感じの男を早速発見した俺は、その様子に先日的美鈴さんの表情を思い出していた。

「やあ。待たせちゃったかな」

雄大は自然にフレンドリーに俺が直感で分かった弟君に声を掛ける。俺の直感恐るべし。

「いえ、大丈夫です。それより今日はどうしたんですか？」

雄大の方を見る弟君。

そう、これこそが俺と彼、柏木鷺との出会いであった。なのであった。

姉弟（後書き）

この物語は、秋島健吾がとある男にとある誘いを持ちかけるよりも大分前のお話です。

まさかの過去に行きました。

では次回。

拒絶（前書き）

おほんほんほん。

ぽぽぽんぽんぽん。

世間はそういつ時期です。

すいませんでした。

拒絶

俺は美鈴さんの弟君をまじまじと見る。

イケメンだ。10人いたら9人はそう認めるであろう爽やかボーイだ。しかしまあ美鈴さんの弟というのであれば俺にとって理解は超速。あの姉にしてこの弟ありである。

「実はね、突然なんだけど紹介したい人がいるんだ」

そう言つて雄大はちらりと俺の方を見る。

さて、奴は何と言つて俺を紹介するつもりだ？

「紹介したい人？えっと、この人ですか？」

弟君も雄大の視線を追いかけて俺を見る。そうです、私です。

「俺の友人でクラスメートの工藤一馬。なんでも柏木のお姉さんに興味があるらしい」

うんうん。そうそう俺は美鈴さんに興味が、ってコリアー……

……！！！！！！！！

「雄大この野郎！近年稀に見るとストレート発言を今するな！」

俺は慌てて雄大を制止する。が、なんとなく時既に遅しな気がする。

「……………」

弟君は訝しげな視線を俺に投げかけてきてるし。やばい、誤解される的なフラグが立つちゃうよ！

「嘘は言っていないじゃん。こういうことは最初にすっきりさせたいたほうがいいもんだよ」

「すっきりさせすぎじゃい！いきなりあんな紹介されたら警戒するだろうが！」

「そつだね。俺ならする」

雄大ー！この時々S野郎が。

「え、えつと……。工藤先輩？」

「うえ！な、何……？」

弟君の真っ直ぐな視線が俺に向けられる。ううむ、俺にそっちの気はないがなにやら照れざるを得ないな。こんなイケメンに見られたら。

「姉に興味があるって本当ですか？」

強い意志を感じさせる口調。そこには若干の敵意すら感じた。

「……ああ。その通りだ」

俺はここは嘘を言ったりごまかしたりすべき場面ではないと判断し、肯定の言葉を口にした。

「……」

夕暮れの教室。ほとんど生徒がいなくなったその場所は、弟君を中心とした静寂に満ちていた。

「本気ですか？」

「ほ、本気だ……」

圧されるような迫力。というか実際俺は圧されていた。

「……分かりました」

弟君はそう言って頷くと、続けて深く頭を下げてきた。

「だったら、姉には不用意には近づかないようにお願いします」

「は？」

弟君の言葉の意味と先程の質問の意味が繋がらない。俺は困惑する。そしてそれは表情に出していたのだろう。弟君はそれを見抜いているかのように言葉をつなげる。

「詳しい事はお話出来ませんが、本当に姉を想うという気持ちがあるのなら姉には近づかないで下さい」

「え？え？」

俺は意味が分からず困惑し、混乱した。

姉思いの弟が姉ちゃんに悪い虫がつかないように奮闘する。その関係図は容易に想像できる。が、弟君の俺に対し口にした拒絶はそれとはまた別な物のように感じた。

「初対面の先輩にこんな事を言うのは失礼だと私も分かっています。ですが、これだけは守ってくださいますようお願いします」

そう言って弟君はもう一度頭を下げる。

「では……」

そして俺の言葉を待たずに弟君はさっさと教室を出て行ってしまった。

「……え？何これ？」

俺は誰もいない空間に向けて素直な心の疑問を投げかける。

「あそこまではっきりと言われるとは。ちょっと予想外だったな」

雄大は顎に手を当て思案のポーズ。

「というか雄大さんや。何でいきなりあんな事言ったのさ？」

「え？いや、だから最初にはっきりさせるところと思ったんだよ」

雄大は思案顔のまま言う。

「なんか知ってるだろ？」

俺は雄大に鋭い視線を向ける。

「ちよっ……！机を持ち上げるのはやめて」

おっと危ない。いちのまにか机を雄大に投げつけようとしてしまったよ。

「知っているっていうか……。美鈴さんがうちの学校に来る前の学校で色々あつたらしいってことしか俺は知らないんだけどね」

「何かあつた？おい、それってかなりの重要情報じゃないのか？」

俺は机を下ろしつつ聞く。

「かもね。で、それ以来美鈴さんとの繋がりを求めて柏木に擦り寄ってくる男共への今みたいな拒絶具合が更にひどくなつたって聞いている」

「ひどくなつたってことはそれまでもあつたってことなんだな？」

そして俺もその大多数に入ると思うとなんかやだな。

「うん。でもそのとある一件があつて以降それは顕著になつたらしい」

「ある一件……。それがなんなのかは分からないわけだ」

俺の言葉に雄大は頷く。

「どっかで誰かが漏れないようにしているんだろうね。まあ美鈴さんのプライバシーにも関わってくる問題だから深くは立ち入れないしね」

雄大の言葉に俺は同意の意味で頷く。

「となると俺は美鈴さんには近づけないな」

「だね。勝手に近づいたら柏木に何をされるか分からないよ」

「うむ。それは全力で避けたい。となれば取る策は一つだ」

「何？」

疑問符を浮かべる雄大に対し俺はにかつと笑って言い放つ。

「弟君と仲良くなるろう」

それは別に斬新でもなんでもない、しかし困難を極めそうな作戦であつた。

拒絶（後書き）

そしてあっという間に夏は終わります。

宿題は終わりません。

頑張れ学生諸君。

では次回。

子猫（前書き）

「やっほー」

『やっほー』

「ごだまですか？

はいそうです。

じゃあいっせー。

子猫

弟君と仲良くなるう。

そう決意を新たにしたのはいいものの、さてまず何から手をつければいいのか。

まずは単純に接触する回数を増やせばいいのか？

いや。あんな紹介の後だから必要以上に下心を疑われて仲良くなるどころの話ではあるまい。

にしても弟君はなぜあんなに俺を拒絶したんだ？俺と弟君は間違いなく初対面。まあ何度か学校ですれ違ってくるいはしているだろうがせいぜいその程度だ。

ならばなぜ……？

……。

うむ、分らん。

ダメだな。どんな考えも俺を納得させるに値する答えではないな。

うーむ、もやもやする。なんとかして早期にこのもやもやをどうにかさせてください神様！

そう思いながら俺は一人とぼとぼと帰路に行く。

「じゃー」

「うむ？」

どこぞから響く猫の声。俺は辺りを見渡す。

すると、近くの茂みの木の上の方に子猫が一匹。

そしてその下でその猫の様子をじっと見る美鈴さんが一人。

……。

……ん？……え？

「俺、今日から神様を信じようと思います」

俺はパンパンと頬を叩いて気合を入れると、この偶然を無駄にはすまいと意気込む。

しかし一步目を踏み出そうかという時、不意に弟君の台詞が俺の脳裏をよぎる。

彼が危惧しているのはまさに今のような状況だろうか？姉と得体の知れない男が二人きりになるということ。

そう考えれば、ここで美鈴さんの下へ一步踏み出す事はすなわち弟君の言葉を裏切る事になる。

そう思い、俺は一瞬その場に踏みとどまるが、だが美鈴さんが猫を見上げつつ困ったような顔をしているのを見て、リスクを背負い込

む覚悟を決めた。

「絶対に変な事考えるなよ俺」

そう自分に言い聞かせつつ俺は美鈴さんの方へ近づいた。

「どうしたの？」

俺がそう話しかけると、美鈴さんはあからさまに驚いたようにびくんと体を震わせてから、ぱっとこっちを見る。

「え、っと……」

見知らぬ大人に声を掛けられた子供のようには怯えた瞳で俺を見る。

「あ、ごめんね。なんか困ってる様子だったからどうしたのかなってさ……」

俺は努めて穏やかに適度に距離を保ちながら言う。

「ニャー」

そんな俺達を木の上の子猫が見つめながら震えた声で鳴く。

「ってもしかして……」

俺は改めて猫を見る。遠目では分からなかったが、よく見れば爪を立てて枝にしがみついているように見える。

「あの猫、下りられないとか？」

俺は猫を指差し、美鈴さんに聞いてみる。

すると美鈴さんは、どことなく警戒するような雰囲気はまどったままだが、

「た、多分そうだと思う……」

と答えてくれた。

「なるほどね……。よし！」

俺は鞆を置き、木の幹に手と足をかける。そこそこ太い木だからまあ強度は大丈夫だろう。

「え、え……？」

いきなり木登りを開始した俺の様子を美鈴さんは困惑した表情でわたたしながら見ている。

なんか美鈴さんが動物みたいに見えたなうむ。

俺はそんなことを思いつつよいしよいしよと木を登っていく。

「久しぶりだがなんとかなるもんだ」

俺はそうして猫のいる高さまでたどり着く。

「さあ、かもん猫！」

俺は手を伸ばすが、猫は高さか俺かは分からないが怖がつてびくびく震えたままその場を動こうとしない。

「まいったな」

このままじゃ猫は下りれないわ美鈴さんはおろおろしっぱなしだわでいい事がない。

ならばと俺は大きく身を乗り出し猫の体を掴みにかかる。手荒い方法だがそれしかあるまい。

しかし俺の手が猫を掴もうとした瞬間、俺の手をとっさに避けた猫の体が枝を離れそのまま地上への落下コースへ……。

「させるか！」

俺は猫の体を追いかけるように勢いよく幹を蹴って虚空へ乗り出すと、猫の体をキャッチしそのまま背中から地上へダイブ！！

「げふう！」

背中に強烈な衝撃が走る。

「ニャー」

猫は俺の手を擦り抜け茂みの中へと消えてしまう。

「だ、大丈夫……？」

相変わらずおろおろしている美鈴さんが俺のそばに寄ってくる。

「お、おう……。なんくるないさーってなもんだ」

そう言っつて気丈にも手を振り振り。ちなみに俺は沖縄出身ではありません。

「で、でも……血が」

「え？」

言われてから気がついた。俺が振っていた手にはべっとりと血がついていた。

「……そういえば痛いな」

背中の痛みでうやむやになっていたがどうやら俺はパニくっていた猫から一撃を貰っていたらしい。

「て、手当てを……」

美鈴さんは自分の鞆の中からハンカチを取り出すと、迷わず俺の手の血でべとべとの部分に当てた。

「っつていやいや！汚れちゃうから」

「で、でもほつといたら傷がひどくなって……」

「いやいや大丈夫だから」

と、俺はそつと押し返すように彼女の手に触れる。

「何してんだよ」

そこに弟君が現れたのは多分、悪戯の成せる技だろう。

神様の悪戯。

子猫（後書き）

修羅場。いいえ、ピンチはチャンスと先人は申しておりました。

なので、

一馬君チャンス！

では次回。

展開（前書き）

三角形の展開式とか懐かしいです。

それだけです。

では、どうぞ。

展開

「あなたは……工藤先輩？」

弟君の目付きが疑わしげなものに変わる。

「……うちの姉と何してたんですか？」

答えによつちやあ、みたいな敵意丸出しの……とも思ったが何となくそれだけではないように感じた。

「よし、一から真実を全て説明しよう」

俺は両手を上げて無抵抗をアピールしつつ、俺と美鈴さんがなぜ一緒にいたのかを懇切丁寧に説明する。

「……猫を、助けたんですか」

「そう。もはやどつちが猫か分からないくらいオドオドした感じで周りを見てたからそのままスルーは出来なかった」

俺の説明に弟君は一定の理解は示してくれた。よかった。これできりあえず惨劇は回避された。

「でも姉さん、よく平気だったね？」

弟君が労るような驚いてるような口調で美鈴さんに言う。

「う、うん……。なんだか、大丈夫だった」

美鈴さんは控えめな、しかし初めて見る笑顔でそう返す。

「というか平気とか大丈夫とか俺はどんな扱いやねん。」

「工藤先輩。姉の為に色々気遣って下さってありがとうございます」
「そう言っつて弟君はぺこり。」

「いやいや、ただ猫を助けようとして失敗しただけの話だし」

そしてその通りだし。

「それよか大丈夫だのなんなのつて俺はどんな扱いやねん」

俺はハハハツと軽く冗談のつもりで口にする。が、笑い飛ばそうとする俺とは対照的に、二人の顔色は優れない。

「あ、あれ……?」

あまりにも温度差がありすぎる。「冗談が冗談じゃすまされないぞ。」

「……ごめん、なさい」

美鈴さんが小さな声で謝る。

「えっと、あの……」

どう返したらいいのか分からずに俺は少し戸惑う。

小さく謝った時の美鈴さんの顔にゾクツときたからではないぞOK？

「……確かにあんな風に言われたら気になると思いますが不快にすら思つかもありません」

弟君が丁寧に、しかしまくし立てるように言葉を連ねる。

「ですが、事情はいずれ必ず話します。なので今は、少なくとも姉の事は悪く思わないで下さい」

「……分かった。事情があるなら仕方ない。それが聞けるまで親睦を深めるまでだ」

俺はぐつと拳を握り締める。なんか燃えてきた。なんかね。

「そういう訳で今度皆で遊びに行こう」

そして気付けば俺はそんな提案をしていた。

「はい？」

弟君は見事にきょとんとした顔になっていた。

イケメンが台無しだ。

「皆で遊びに行って親睦を深めよう！」

俺はこれこそ最良の案だとばかりにごり押す。

「どっ、だい……姉さん」

弟君は恐る恐ると言った感じで美鈴さんに問う。

「……………」

美鈴さんは少し考える風にあごに手を添え首を傾げる。

「まあもちろん無理にとは言わないしそもそもが無茶苦茶な誘い……」

「いいよ」

……………え？

俺は予防線をせっせと張っている最中に飛び込んできたミサイルに驚きを顔にした。

「姉さん、行くのかい？」

弟君も驚きの表情。

「うん。この人は悪い人じゃないし驚の知っている人なら大丈夫……だと思っ」

美鈴さんはそう言って一回大きく頷く。

「……………え？何？この展開は遊びに行ける展開なの？」

我ながらこんなにスムーズに話が進むとは思わなんだ。

「ええ、姉がいいというのであれば……。一応念のために確認ですが二人きりのつもりというかその気があったという事はないですね？」

弟君の目がぎろりとこちらを向く。

「そんな図々しいこと考えてる訳ないじゃないか」

嘘です。あわよくばとか考えてました。

「その展開を仮に望むとしても段階という物が必要でしょうに」

嘘です。若さで一足飛びしたい年頃です。

「……」

弟君の冷たい視線が俺の心を攻める。あふん。

そんな俺達の様子をぼーっとしたような感じで見詰める美鈴さん。

なにやら奇妙な3人の関係性がここに誕生したのであった。

だが、棚にタックルしてぼた餅を落とすという奇抜な方法になつてしまったものの、遊びに行くという約束が取り付けられたのは大きな報酬だ。

俺は詳細の連絡用に弟君とアドレスを交換し、二人とはその場で別れた。

家路を一人すたこら進む中で、俺はこれからの作戦について考えて

いた。

まずメンバーだ。あの弟君と一緒にとなればそれに対応できるクツシ
ヨンを一人用意したいところだ。

そうでもしなければ始終監視されて終わりそんな気さえする。それ
は絶対に避けねばなるまい。

となるとやはり数合わせの意味も含めて女子がいいのか？いたかな
……。

と俺が考え事をしながら歩いていると、

「うおっぶー！」

向かいから歩いてきた人と肩がぶつかってしまった。

「すみません！」

「いえいえ」

俺はその温厚そうなおじさんに謝ると、地面に落ちてしまったおじ
さんの、免許証だな、を素早く拾う。

「どうぞ」

「ああ、ありがとう」

おじさんはそのまま免許証をしまいつつ足早にその場を去っていく。

「……あれ？」

あのおじさん……。なんか知っている気がする……。

……そんな訳ないか。さて、帰る帰る。

俺は家への道を急いだ。

展開（後書き）

三角錐とかもありましたな。

では次回。

演劇（前書き）

（卒業生 答辞）

卒業生 A 「暑かったはずの」

卒業生 皆 「この間」「

卒業生 B 「突然涼しくなった」

卒業生 皆 「今日この頃」「

校長 「落差すごいなう」

ではどうだい。

演劇

勢いよく遊びに行く約束を取り付けたはいいものの、しかし面子はどうするんだという問題に直面した俺。はてさてこの先どうなる事やら。

「というわけなんだ」

「そついうわけなのか」

俺は休み時間に雄大に大いなる前進とその先に見えた高い壁について相談していた。

「というよりもまずその誘いに乗ってくれたのが奇跡だよね」

「うむ。俺自身驚きに塗れている。現在進行形で」

俺は目を閉じ、イメージする。……うん、塗れてる塗れてる。

「そこまでいけたんならこの際二人きりでデートを、くらいまで勢いづけばよかったのに」

「ぬっ!?!」

塗れてる最中の俺に対し強烈な爆弾を放り込んでくる雄大。

「……いやいやいや。弟君の手前もあるしそれに何か事情があるみたいだからいきなりそのステップは無理だろ!」

俺はそう言いつつしかし魅力しか感じないその『二人きり』『デート』という単語に胸が活きのいい鯖の如く跳ね回る。

「そして俺自身美鈴さんとはまだ親しいとは言えない、というか顔見知りと言つのも正直なギリなラインだと思つが……」

「でも遊びに誘つたら乗ってくれた。大事なのはそこだよ」

「そこなのか」

俺はずずいと雄大に寄る。

「柏木が姉を思い得体の知れない男を寄せ付けたくないという気持ちは分かるけども最終的には本人次第な訳だしね」

「うむ」

「あれかな？猫を助けようとした一馬に何か感じるものがあったのかもしれないし」

「おお！」

「でも皆で、って言ったのは一馬だからそこは責任持とうね」

「ぐふー！」

そうだった。俺が、俺こそが「皆で」という単語を使ったのだ。なんてこつたい。自分の放つた網に自分で引っかかるとは。

「だから、まあその辺はなんというかうまくやってよ、うん」

雄大は言うだけ言って最後は俺にぶん投げて終わった。

「ふむう……。どうしたものか」

俺は考えた。授業そっちのけで考えた。そして授業中指されて困った。怒られた。

を繰り返し、放課後に至る。その段階に至り俺の行き着いた結論は、

『弟君を知ろう』

ということであった。

弟君と仲良くなるうというのは以前から考えていたが、美鈴さんのいい感じの出会いという突発的なイベントが起こってしまった為一時俺の中でないがしろにされていた。

だが今こそ原点に立ち返ろう。

というわけで意気込んできました体育館。

弟君の所属する演劇部は体育館のステージで稽古を行っていた。

俺はその他運動部などの邪魔にならないように端の方を陣取り、演劇部の様子を眺める。

剣劇のある芝居でもやる気なのだろうか。模造刀のようなものを持つてなにやら動き回っている。

その中心に弟君はいた。

皆に積極的に声を掛けつつ練習している。そしてイケメン。

先輩に対しても引いた態度を取ってるように見えない。まさしくイケメン。

「文句ねえなこりゃ」

青春というのはああいうのを言うのかも知れぬ。全力で自分のやりたいことやってる弟君の姿は俺にそう思わせてあまりあった。

「こりゃ俺も生半可ではいかな」

俺はパンパンと頬を叩き、自分に気合を入れる。

「何が生半可じゃダメなの？」

雄大登場。なにを隠そうこの男も演劇部なのだ。だから弟君と面識があったのだ。納得。

「……何を大きく頷いてるの？」

「見えない所とコミュニケーションをとっただけだ。気にするな」

「何、幽霊でもいたの？」

「違うわい」

俺はそんなギリギリなやり取りを経て、雄大に向き直る。

「にしても相変わらず練習熱心だな」

「そうだね。学園祭控えて皆気合十分だね」

学園祭。そうかもう少ししたらそんな季節か。

「ではその前に弟君とも仲良くなっておかねばな」

「ん？なんで？」

「そして美鈴さんと仲良くなり、一緒に学園祭をエンジョイする為に」

俺はぐつと拳を握り締める。

「はは……。真っ直ぐだね」

雄大は穏やかに笑う。

「じゃあそうだったら二人でうちの公演観に来てよ」

「いいなそれ。それは最高のシナリオと呼ばざるを得ないよしそうしよう」

その為にも俺は頑張らねばなるまい。

まずは弟君と仲良くなり、目先の遊びに行こうぜイベントをどうにかこうにか成功させ、ハッピーエンド的な結末へ向けて突き進みたい。是非とも。

演劇（後書き）

もっいゝくつねゝとと……。

あ、特に何もないや。

では次回。

良好（前書き）

ドンガラガラガラガッシャー……ン……!!

ザー……!!

今日は、そんな日でした。

では、ごきげん。

良好

前回までのあらすじ。

俺は演劇部の練習を見ていてとてもやる気を出した。なんか、こっつ青春してえ的な感じに。

以上。

「ぐう……」

そんな俺はやる気を持って余し体育館の隅の方で座ったままうつらうつら寝てしまっていた。

「おい」

と呼ぶ声が耳に入った気がしたが恐らく気のせいだ。

「かーずまー」

俺の名前を呼ぶ声が聞こえたがこれはあれだろう幻聴だ。

「えいつー」

俺の頭を叩かれた気がしたがこれもまた思い過ごし……。

「って、んなわけあるかこのボケがー！」

俺は勢いよくグワツと起きると、俺に危害を加えようとした人間に威嚇を試みる。

「よだれ垂れてるよ」

威嚇した先の雄大はそう言って俺の口元を指差した。よだれって…。
…。恥ずかしいなあもう。

「何用だ？」

俺はティッシュでよだれを拭きつつ聞く。

「いや、用というか部活終わったから帰らないかなと思って」

「何？もうそんな時間か？」

俺はちらり時計を見る。結構な時間居眠りしていたようだ。

「なんてこった。よし帰ろうそうしよう」

俺は立ち上がると荷物を持つ。

そして気づく。雄大の後ろにもう一人、人がいる事に。

弟君であった。なるほど雄大よそういうことか貴殿も策士よのう。

こうして自然な形で俺と弟君を引き合わせ仲良くなってしまえとまあそういうわけですな。

「雄大……。お前って奴は……」

俺は持つべきは友人だなあと思いつつ雄大の肩をがしり掴む。

「……えっと」

一方の雄大は困り顔。

「なんかよく分からないけど、帰ろうか」

そういう結論に落ち着いた。

という訳で帰路に就いた我々3人であるが、まあこれはある程度予想は出来たのだが、

「……」

会話がないんだなこれが。うむ。ない。

そして俺は知っていた。こんな場合無い物を無理矢理にひねり出すとしてもいい結果は生まれない。

しかして俺はこのまま行動に出ないというのは果たして正解の選択肢と言えるのか、疑問の一言であった。

よし、こうなればとにかくその辺の雑草に関する事でいいから話題を……。

「あ」

と思った矢先雄大が小さく声をあげる。

なにかと思い俺はその視線の先を見ると、

「お」

思わず声が漏れた。

美鈴さんがいた。この前猫を助けた近くにしゃがみこんでなにかしていた。

「姉さん！」

弟君が美鈴さんに駆け寄る。

美鈴さんが弟君の声に気づきこちらを向く。その腕の中にはこの前助けた子猫がすっばりと収まっていた。

「姉さん、それ……」

弟君は気持ちよさげにのどを鳴らしている子猫を指差す。

「うん、なんか懐いてもらえちゃったみたい」

と喋ってえへへ、と笑みをこぼす。

「……」

その様子を見ていた俺が思うこと、そんなの知れていた。

おい、猫今すぐそこを代われ。

……はっ！一瞬意識がよくない方向にシフトしようとしてしまった。
子猫に嫉妬しとる場合ではなからう。

「あ……。工藤さん達も一緒なんだね」

そう言っつて美鈴さんは俺達にぺこり頭を下げてる。

「ん？」

そんな頭を下げられる理由が思いつかない俺はすこしきよとん。

「ほら、この前助けてくれたお兄ちゃんだよ」

優しい笑顔のまま子猫の顔を俺に向ける美鈴さん。

その様子と台詞とのマッチングにより俺が心内悶絶した事はもはや
書くに及ばないだろう。

俺はそして悶絶しながら強く思った。こうして笑顔が見れて可愛ら
しい仕草が見れただけで心が満たされる人がいるって素晴らしいな
と。

その人の笑顔一つ見ただけでどんな苦労でも出来る気がする。そ
してどんなに苦労をしてもその笑顔で報われる気がする。

俺はもはや既に幸せなのかもしれない。

「それにしても驚がお二人と一緒に珍しいね？」

「あ、ああ。部活帰りで一緒になってね」

「そう。よかった」

「良かった？」

弟君は美鈴さんの台詞に若干の疑問符。

「驚にいい友達が出来たから」

「友達……」

「うん。だって最近の驚はずっと私に構ってくれてたから。だから嬉しいんだ」

美鈴さんは少し目を伏せつつも本当に嬉しそうにそう口にする。

「構ってって……。あんなことの後じゃ当たり前だろ……っ」

弟君は大きくそう言ってから、俺達の方を気にする。

あんな事？一体何の事だ？そしてそれは俺達に聞かれたくないことなのか？

俺は弟君の言動に多少の疑問を抱く。

「あ、そうだ……。あ、あの、工藤さん」

「は、はい？」

とてつ、と猫を抱いたまま美鈴さんが俺のそばに寄ってくる。

「今度遊びに行く予定、決めませんか？」

「え？……。あ、ああ！いいともですとも！」

俺は大きく頷きそう返事をする。

事態は俺にとっていい方向に進みつつあった。

今だけは感謝しておこう。猫よ。

良好（後書き）

カーーーーーッ! ! ! ! !

ジリジリジリジリッ。

この前まではもっばらこんな感じでした。

では次回。

独白（前書き）

夏休みが終わる。

そして秋が始まる。

更には冬が来る。

そしてお正月でござんす。

一年はっや。

独白

これは柏木鷺の独白である。

……まあ独白と言うほど大した事は語らないとは思うが。

俺は実の姉、美鈴とは昔から仲が良かった。と周りの大人たちは口々に言っていた。

仲がいい。というよりは、鈍臭くて何をするにもカタツムリ状態な姉の手を弟の俺が引っ張っていたというのが正しい構図である。

何をするにも危なっかしくて見てられなくて、俺は姉の様子ばかりを見ながら育った。

しかしまあ、いくら鈍臭いといっても年を重ねいざ高校生となった頃には、姉も俺が変に目を配らなくても大丈夫なくらいに一丁前になっていた。

だから俺は安心していった。

そう、俺が安心して目を離れた時だった。

とある事件が起きた。

そしてその事件に姉は巻き込まれた。

いや、巻き込まれたという言い方は正しくない。

姉は事件の中心にいた。

『被害者』という枠の中心に。

俺は悔やんだ。自分が今まで通り姉に注意を払っていればあんな事件は起きなかったんじゃないか、と。

姉は心身共に傷ついた。体の傷は跡も残らず消えるという医者が見立てだったが、心の傷は違った。

ともすれば一生消えないかもしれない傷を姉は15にして背負ってしまったのである。残酷としか言い様が無かった。

俺は絶望に暮れた。己の非力を痛感し、完全に前を向くのをやめてしまった。

俺が悲劇の中に入ったところで何も変わらないことは分かっていたし他にやれることはいくらだってあったと思う。しかし俺にはそれが出来なかった。

大人たちも上辺だけは優しい言葉を掛けてくれたが、しかし踏み込んで姉の為に動いてくれる人はいなかった。

大人なんて皆そうだ。そういうものだ。俺はそう思った。

思っていたのだが……。

訂正しよう。一部の大人は『皆』の枠の中には収まらなかった。

ある日突然とある老夫婦が姉の前に現れた。

医者だというそのスキンヘッドの爺さんは姉に湯を入れんがごとき勢いで姉の周りの空気中の温度を上昇させ、婆さんは婆さんで爺さんを抑えつつ姉の心の傷に優しく痛まぬように痛みを解きほぐしていった。

俺は連日現れるこの老夫婦にひたすら啞然としていた。

そんな啞然としている俺に、爺さんがそのしわくちゃな手で俺の肩をしっかと掴み、

『大変じゃったな』

と笑顔で言ってきた。

大変だった？まあ確かに大変ではあった。傷を負った姉を好奇の目から守り、かつ自分が先に倒れぬように気を張り巡らして……。

『あとはこの爺と婆に任せて休みなさい』

爺さんの言葉に、俺はふつと肩の力が抜けていくのを感じた。

俺達の親は忙しく全国を駆け回るような仕事をしている。だから俺が姉を守らねばという意識があった。

そしてそれは俺にしか出来ないと思っていた。

思い込んでいた。

しかしそんな風に思う必要は無かった。手を差し伸べてくる大人は

いくらでもいた。俺が勝手に役に立たないと思っただけで。

こんなにも凶々しくそして頼もしい大人がいたにも関わらず。

この老夫婦のお陰で姉はずいぶんと元気を取り戻した。

そしてそれを見届けるかのように婆さんの方がこの世を去った。

これという礼もさせてもらえないままの、別れだった。

そして最近、爺さんも後を追っていった。

姉と共に葬儀に参列して、俺達姉弟はその死を悼んだ。せつかくの人との繋がりのおかげに脆いかを思い知らされた。

が、どうやらその別れは、後に知った事だが、新たな出会いを生み出していた。

そしてその出会いが脆く崩れたかに見えた繋がりにはいるものだと知り、俺は偶然に恐怖した。

そしてその出会いは姉との距離を急速に縮めようとしていた。

俺は最初大いに焦った。姉に不用意に近づけていいものか、と。

しかしその心配は杞憂に終わりそうだった。

その出会いは姉によいものをもたらそうとしていた。とにかくいい意味で。

まあ弟の立場としては大変複雑な気持ちですがね。

でもまあ姉に幸せになってもらいたいからこそ、俺はある賭けにの
ることにした。

三國先輩からの、突拍子もない提案。

『遊びに行く日、奴らを二人きりにしてみる気、ない？』

とんでもなく突拍子もない提案。しかし、俺は自分でも驚くほどす
んなりと、その賭けに乗った。

ただし、条件を一つ添えて。

『工藤先輩が姉に手を出したら乱闘します』

という条件を。

あの爺さんの孫ならなにしか分らないしな、うん。

独白（後書き）

美鈴さんがどんな事件に巻き込まれたのか。乞うご期待。

では次回。

経緯（前書き）

もう秋なんどすなあ。

夏もおわりなんどすなあ。

京都弁っぽいには特に意味はなしでござす。

経緯

「どうしてこうしてこうなった？」

疑問を抱く俺は工藤一馬だよん。

俺は今、水族館的遊園地的全てまるっと収めて行楽地、みたいな場所にいる。

一人。違う。残念ながら違う。

では何人か？

アンサー……二人。

……。

二人！？

なぜに！しかもお隣におわすは柏木美鈴さんではないか！なんたる僥倖であるか！

いや、実は僥倖でもなんでもないわけなのだがね。

事の至りはつい4時間程前に遡る。

さあ今日は待ちに待った美鈴さんを中心とした遊びに行く日だー、と目覚ましなしで俺が気持ちよく起床を果たしたところから始めようか。

俺は自分でも驚くくらいすっかりと目覚めた。昨夜は楽しみすぎて眠れないんじゃないかとの下馬評もあがったが、俺はその大方の予想を裏切り、見事に熟睡を勝ち取った。

いやあ、羊もたまには数えてみるもんだ。

俺が爽やかな目覚めと今日という日への希望を胸に抱きリビングへと向かうと、そこには今日への希望という言葉とはまるで無縁な光景が広がっていた。

「またかよ……」

俺の視界に納まったのは、ソファーに寝そべる我が姉の姿であった。ちなみにスーツ姿のまま。

俺の姉、工藤椎菜くどうしいなは、刑事である。しかもそこそ能力も地位もある。

しかしその反面家では我ら家族に容赦なく元来のだらしなさを披露することを生業とするともない姉であった。

今日もまた大方麻朝まで仕事で疲れて着替えるのも面倒でこうして横になってしまったのであろう。

刑事のイメージ崩れるわあ。

「ん……。一馬……？」

近距離からの俺の念に気づいたのか姉貴がつっすらと目を開ける。

「おう。また仕事上がりか姉貴？」

「もう頼むから皆事件とか起こさないでって感じよね。今すぐ人類は一人残らず善良な何かに変貌すべきよう……」

我が姉がクッションを抱きしめながら意味の分かりそうでやはり分からない事をぶつくさ言っている。

「じゃあ警察やめりゃいいじゃん……」

俺がそうやれやれと言った感じにそう言うと、姉貴はがばっと起き上がりそして声を大にして言う。

「それはいや！だって刑事になって格好よく、そりゃもう格好良く犯人とか捕まえたりしたいな」とかそういう人のなにがしかを助けるような刑事になるって決めてようやくここまで辿り着いたんですもの！やめてたまるもんですか！むしろここからよ、ここから！」

姉貴はふんすと鼻を鳴らす。

「……あ、そう。じゃあつづけりゃあいじゃん。の前に着替えて自分の部屋で寝なよ」

「ええー……。めんどい」

姉貴は再びぼすんとソファーに横になる。

「なんだかなあ」

俺はもはや姉貴の事は無視してさっさと準備を始める。

そうしてさて準備完了。あとは雄大と待ち合わせていざ現場へと旅立つのみ。という段階になって、その雄大からメールがきた。

『先に行つてて』

「ん？遅刻かこの野郎。けしからんな畜生」

俺は雄大に遠慮なくそうさせてもらおうという思いの丈をのせた返信を返すと、一人解錠たる水族館的遊園地的な所へと向かい始める。

そうしてついた。正面入口前の噴水前。間違いなくここだ。

俺は入念に集合場所を確認し、その噴水の前を陣取った。

「集合の時間までまだ若干余裕があるな。どうしたもんかなこの時間」

何をするにも中途半端な時間を、俺は噴水の周りをぐるぐる回るという奇抜なアイデアで切り抜ける作戦に打って出た。

美鈴さんにはもちろん弟君が付随するはず。となると今回は贅沢に二人きりとか狙うのは高望みかねえ。まあいきなり二人にさせられても俺が困ってしまうのだがね。

まあ今日のこの集まりは柵から牡丹餅的ラッキーの中で掴んだものだからな。謙虚にいこうじゃないか。

そうそう、謙虚ばんざーい。

「つてうお!?!」

「きゃっ!?!」

俺は考えに集中しすぎていたらしい。目の前に立っていた人にぶつかりそうになってしまっ。

「い、ごめんなさ……い」

とりあえず謝ろうとした俺の視界に今日最も会いたかった人その人が入ってきた。

「あ、お、おはようございます」

控えめに挨拶するその可愛らしい笑顔の主、柏木美鈴さんは一人噴水前に佇んでいた。

「え……つと、一人?」

という質問をしつつ俺の心の中では、

よーし期待するな俺期待するなよー!きつとこれはあれだ。弟君はトイレ行ってますよーでもってすぐに雄大辺り率いて戻ってくるんですね、分かります。

しかし俺の悲しき意図に反し美鈴さんは、

「はい……」

と頷く。

「え?」

「驚が色々用があるから先に行つて行って言うから先に来たの」

あ、なんだそういふことね。合点合点。

やっぱりそういふことやねんと俺が妙に納得していると、ぶるぶると俺の携帯が揺れる。

「ん?.....雄大?」

送信者は雄大。内容は.....。

『二人でごゆつくり』

.....んん?

そして物語は冒頭に到達する。

経緯（後書き）

うまいラーメンが食いたい。

でもいざ日が明けたら別の物食べてるんだろっなあ。

人間そんなもんだ。

では次回。

水槽（前書き）

深海に棲む謎の巨大生物。

なかなかぞくつとくるフードですな。

むふ。

水槽

チャンスとはピンチにも近い状況である。

具体例をあげよう！

今の俺。

そう！

今の俺。

遊園地的水族館的な場所で美鈴さんと出会った俺。弟君の姿も当然あるかと思いきや、どうやら事情は俺の予想し得る現実の斜め上を行ったらしい。

「つまりそういうことか雄大よう……」

俺は奴とのメールのやりとりの中で完全に奴の狙いが分かった。

俺と美鈴さんを半強制的に二人きりにしちゃおうぜ的な、そういう的な感じベイベー的な感じだろ？

言っとくが打ち間違いとかじゃないからね。

それにしても意外だったのはどうやら弟君も雄大ノリに乗ったということだ。

てっきりお姉ちゃんを守る為、俺という名の魔弾を防ぐキーパーに

なるかとも思ったが。

ただのシスコンじゃなかったわけか。なんだか安心。

しかしてこの状況はなかなか緊張するな。ただでさえ緊張しとっ
たっつーのに。

だが二人きりというのは確かに前述の通りチャンスでありピンチ。

うむ、日本人はすぐリスク、つまりピンチの方を気にしたが、
そうじゃないだろ。チャンスなんだろ、これは！むしろこっちが大
前提。

しかもここはどこだ！

水族館で！

遊園地で！

デートスポットじゃんんんんん！！

はい、テンションが緊張を超えました。行動開始です。

「さて美鈴さん」

「はい？」

美鈴さんは突然きりつとした俺の顔に小首を傾げる。

あん、可愛い。

じゃなくて。

「どつやら雄大と弟君は我々の前に現れないらしい」

「え？そうなんですか？」

驚く美鈴さん。うん、正しい反応ですな。

「うん。だから自分達の事は気にせずに楽しんでくれよ、とさ」

こう言つて美鈴さんがどういった反応をするか、ある種賭けみたいな感覚だった。

美鈴さん自身が乗り気でなければ意味ないしね。ん？美鈴さんが乗り気な可能性つて如何程だ？ちよつと不安だぞ。

「…………え。く、工藤さんと二人きりで回れるんですか？」

美鈴さんは今度はテンションが若干高く驚いていた。

「あ、ああ。むしろそれしか選択肢が無いらしい」

俺は少しそのテンションに驚きつつそう言つ。

ん？待てよ。なんか今すごい嬉しい言い方されなかつたか？

…………。

まあ、いいや。

と、言うわけで、俺と美鈴さんのこれをデートと呼ばずしてなんと呼ぶ的なイベントが始まった。

俺達が最初に入ったのは水族館のフロア。

巨大な水槽に大小様々な魚達が綺麗に泳いでる。

「ふわぁ……………」

隣で美鈴さんが感嘆の声を上げる。だがこの光景はそれに値するものだった。

周りの家族連れやカップルも同じ感想を抱いているのか皆じつと水槽の中の海を見ていた。

……………カップル。

俺達も周りから見たらカップルに見えるんだろうか？

年頃の男女が二人並んでいる。その光景はカップルと思われてもなら不思議はないだろう。

だが俺達は今はカップルではない。

『今は……………。いつかはそんな言い訳がましいこと言わずに済むようにになりたいなあ。』

頑張ろう。うん。

俺はイワシ群れを見ながら密かに決意を新たにしていた。

という感じで水族館エリアをフラフラしていると、美鈴さんが突然立ち止まった。

「うん？どしたの？」

美鈴さんを見ると、その視線はガラス越しにある動物へ向けられていた。

「……………白熊？」

そう白熊。巨大なそいつが寝そべりながら美鈴さんをじっと見ていた。

「可愛い」

美鈴さんがぼつり呟く。

「へえ、白熊好きなの？」

「えっと……………この子が好き、かな？」

美鈴さんは相変わらず見詰めあいながら言う。

「へ？こいつが？」

「うん、だって私のこと見てくれてるんだもん」

美鈴さんはふるふると白熊に手を振る。

当の白熊はぶふんと鼻を鳴らし目を瞑って寝に入ってしまった。

っておいこら熊野郎。美鈴さんの好意をこの野郎。

俺は熊に闘争心を燃やすが、実際戦った勝てそうな気がないので却下。

命拾いしたな熊。白い熊。

水族館エリアは終始こんな感じで和やかに進んだ。

イルカショーで水掛けられたり、二人でサメを見て興奮したり。

平和だった。幸せだった。

そして、それから遊園地的なエリアに移るのだが、そこからが仁義無き幸福体験と理性の戦いに発展する事になる。

次回に続く

水槽（後書き）

イカとかタコとか定番ですな。

刺身したるうか、ってなもんですよ。

では次回。

悲鳴（前書き）

虫歯がある気がして歯医者に行き、

実際虫歯だったけれど、

自分が思ってた場所とは全然違った時の、

不信感。

あるある。

悲鳴

ぎやあああああああああ！！

ひひひひひひひひひひひひひひひひ！！

遊園地的なエリアで、その楽しげなエリアに響き渡る叫び声。

その異様な光景の正体とは……！？

「いや、ジェットコースターなんですけどね」

「……誰に向かって言ってるの？」

「うんにゃ、気にしないでおくれ」

俺と美鈴さんはその叫び声の量産体勢でお送りする名物ジェットコースターの前にいる。

美鈴さんが嫌がるかな、とか並ぶ前には考えもしたが案外ノリノリだったためあれよあれよという間に次はここまでの方ですー、の係員の『ここまで』に入るところまで来た。

この遊園地のジェットコースターはとにかく『落差』と『ひねり』がとんでもないらしい。そしてそれは並んでいる間に下から見上げている時にも十二分に分かった。

「……………」

なんかすごくワクワクしてる美鈴さんの様子を見ていたらここで踏ん張らんかい俺！と俺の中の俺が俺に対し激を飛ばす。

そうだな。そもそも好きな子と成り行きとはいえデートと言って差し支えないような事をしているのだからこんなことでへこたれて文句を言うわけにはいかない。

発車を知らせるベル音が鳴り響き、ガコンという何か引つかかった金具を外す様な音と共にゆっくりと俺の戦いが始まった。

「だあああああああああああああああ！？」

「ぎゃあああああつあはははー！ー！ー！ー！」

そして戦いは終わった。まあ勝ったか負けたかはこの簡略化されたレポートで察してくれというかこれで勘弁してつかーさい。

ただ、その衝撃に圧倒されっぱなしだった俺の隣で、全力で楽しんでいる美鈴さんを見れたから……………全てオツケーです。御の字です。

次に我々が向かったのは、

『みぎやあああああああああ！！？？？』

という今度は同じ様で違うタイプの悲鳴があがるアトラクション。
そう、お化け屋敷の前インザウー!

俗に言うあれです。廃病的なイメージのあそこみたいなアトラクションです。

ん?なんで俺具体的な単語が出てこないんだ?

……ま、いいか。

俺は特段怖がりでもなければこういうアトラクションにもある程度の耐性はある。でもって怖すぎるあまり本物も近寄らないと言われるこのお化け屋敷に、ちよいと興味があつた為、今並んでます。

美鈴さんかというと、なんかそわそわしてます。ジェットコースターの時とは明らかに雰囲気違います。

「……もしかしなくてもこういうの苦手?」

こういうびくびくしてる美鈴さんもそそれ、もとい可愛らしいが、しかし俺の中の潜在的Sにこのまま身を委ねるわけにはいくまい。ここは紳士的に振舞おう。

「ちょっと、ね……。でも大丈夫だから」

美鈴さんはそう言ってちょっと引きつった笑顔。ああ、なんか新しい何かを目覚めさせてくれそうな笑顔だ。

「無理はしないで良いからね?」

だが目覚めさせる前に俺はあくまで紳士。その振る舞いを忘れたも
うことなかれ。

「うん……。でも、工藤君が一緒だから大丈夫」

チユドーーーーー。

この瞬間、紳士という名の尊い戦士は吹き飛びました。

そしてその紳士に代わり、世を支配したるは新しき『NANIKKA』
という名の神。

その神がこの世の支配のまず第一歩目としてしたりける行いとは、

柏木美鈴という可憐な美少女とお化け屋敷に入ることであった。

そして神は、いざお化け屋敷に入りつつ、こう呟く。

馬鹿じゃないの？と。

いざ中に入るとそこは想像以上に生々しい空間が広がっていた。

ちかちかとした照明が灯る廊下や病室、手術室なんかをぐるり回ら
ないと先に進めない仕組。

先が見えない訳ではない。しかしちゃんと見通せるわけではないその絶妙な明度に、俺は脱帽の一言。

そして辺りは事件でもあったのかと言いたくなる程の血痕がそこかしこに……。

そんな不気味極まりない空間で、美鈴さんはいつと……、

「……っ……っ」

どえらく分かりやすく怯えていた。

一歩進む度に「ひっ」とか「きゃっ」とか声を上げている。そして俺とは着かず離れずな距離感をキープ。うーん、もどかしい。

なんかこう、そんなに怖いなら俺を頼ってもいいよ、とは心ではお釣りが来るほど思いつつもしかし声に出すわけにはいかないそんな想いに、俺は身を焦がしていた。

ていうか美鈴さんは何か驚かされる度になにかすがれる物を探しているようにも見えるのだが……、俺がその探し物になれる日は来ないのだろうか。

と、何気なく廊下の角を曲がった瞬間だった。

又ボーンッ。

手術中に何があったんですかと聞きたくなるような血まみれのドクター登場。今まの『出るぞ出るぞ……ほら出た』的なのとは違い完

全に不意打ち。

「うおっ!?!」

俺は今日一の驚き。ちよいとのけぞった。

さて美鈴さんは……

「ぎゃあああああああああ!?!」

今まで溜め込んでいたものを一息に吐き出すかのような悲鳴。

ぎゅっ。

「ンン!?!」

と同時に俺の腕を包む柔らかくそして幸せな気配のする何か。

はつきり言っただろうか。美鈴さんが俺の腕にしがみついてきましたよ!

俺はその至福たる瞬間に、ここが化け物屋敷である事を忘れてトリップしかける。

ビバ・お化け屋敷。ビバ・不意打ち。

そしてこの幸福は出口まで続くことになる。

悲鳴（後書き）

昼時に歯医者で治療受けて、

先生から、

「今から30分は何も食べないで下さい」

と言われた時の、

絶望。

あるある。

では次回。

秘境（前書き）

A 「鳥だ！」

B 「飛行機だ！」

C 「アメンボだ！」

A、B 「……あ、アメンボか」

秘境

前回までのあらすじ。

俺は友人らに謀られて美鈴さんと二人でいわゆるデートというものを行う事に。

そしてお化け屋敷でまさかのラッキーハプニングいただきましたありがとうございます。

そして物語は進みます。

「……」

俺は緩みきっていた。どのくらい緩んでたかと言うとセンター試験で九九が出たかのような緩さ。

もはや緩いと言うよりも出題側があほとしか思えないね。

でも仕方が無い。俺は未だはつきりと鮮烈に感觸が残る腕とかその辺りの我が肉体から送られる生々しい情報を幾度と無く脳内でループして楽しんでいた。

活字になると一気に気持ち悪いなあ。

という意見はさて置いて、舞台は化け物屋敷から移る。

と、いうよりもそろそろ腹も空くであろうお昼時。

で、なにか食べようかと俺が提案してから美鈴さんの様子がなにやらおかしい。

なんというかソワソワしだした。

なんだろう。トイレかな？

というデリカシーの10割方を時の彼方に忘れてきた俺はほっとくとして、ソワソワ美鈴さんはおずおずと慎重に様子を伺うように俺を上目遣いに見てくる。

鼓動がいい意味で高鳴る。今日何度目か分かりません。

「あ、あのね……」

そして美鈴さんはおずおずと切り出す。

「お弁当、作ってきたの……」

「……」

美鈴さんの発言を受けて、俺の脳内にある事が起きた。

なにが起きたかって？

『革命』である!!

て、手作りきてしまった……!

え?なに?死ぬのか?俺はこの後身に余る幸せを享受しすぎた罪で死ぬのか……!!!!

内側はこんな感じになっていた。しかしそんな内側の戦乱など外側には欠片とて出してはいけない。

それが紳士つてもんだぜ!キリッ。

「マジで!??うつわ嬉しすぎる。今なら空も飛べるはず」

落ち着け俺。漏れてる。紳士の隙間から少し漏れてるよ。

「え、えへへ……。」

しかし俺が大きさに喜んだのが美鈴さんには良かったらしい。恥ずかしそうにしかし嬉しそうに微笑む。

……あ、やっぱり俺この後死ぬ気がする。

だが死ぬわけにはいかない。

なんてっ たって目の前には美鈴さんお手製のお弁当という名の桃源

郷が広がっているのだから。

これを食せずに死のうものなら俺は世界を呪いで粉碎出来る自信がある。

「お口に合えばいいけど……」

美鈴さんは色鮮やかなサンドイッチにちらちら目を向けつつぼそりと言っ。

むふん。奥ゆかしさが足りないと言われる現代の若者社会においてこんな女の子に出会わせてくれた八百万の神に感謝。

どの神様に頭下げればいいのか分からないけど。

「よっし、いただきます」

俺は手をパンと合わせると、さっそくサンドイッチを手に取りぱくり。

ガンダーラ。

……はっ！あまりの旨さとこの環境からくる幸せに思わず変なワードが俺の中を駆け抜けた。

「どう、かな……?」

隣では不安そうに美鈴さんが俺の顔を覗き込んでくる。

なんかもうそれだけで思わず美味しいって言っちゃいそう。しかし俺はそんな真似はしない。

な　　ぜ　　な　　ら　　！！

実際美味いからである。だから条件反射などに頼らずとも俺は最良の答えを導き出す。

「うん、美味しいよ」

俺なりにそのニュアンスを伝える為に精一杯の笑顔。

そしてその笑顔と言葉で少しは伝わってくれたのか美鈴さんはまさに胸を撫で下ろし……。

そこで俺はさっきのお化け屋敷ありがとうございました事件を思い出す。

あの時俺の腕に感じた美鈴さんの持つ女性特有の柔らかさを……。

その大きさを……!!

「？」

美鈴さんは俺の視線が不自然な事に気づいたのかきよんとした顔。
俺は慌てて目を逸らす。

なんとか俺のエロスから来た視線の意味には気づかなかつたみたいだ。よかった。

にしても俺は思う。

今の何気なく首を傾げた動作一つとっても俺の心にはぎゅんぎゅんくるものがあった。

そしてこれからもそれはつづくのだろう。

俺がこの人を好きであり続けるかぎり。

だからこそ俺は思う。

この人に、柏木美鈴という女性に、

心底から好かれないと。

その為にこれからも生半可な気持ちは捨てて頑張らねばな。

と、俺はごくろサンドイッチを飲み込み、

「ぐっ」

喉に詰まらせた。

「だ、大丈夫！」

と言ってお茶を出してくれる美鈴さんも可愛かったのだが。

この時ばかりは命が優先だった。

秘境（後書き）

今回の前書きはふざけてますね。と私後書きは怒りをあらわにします。

ぶんぶんぶん！！

では次回。

夕日（前書き）

眠いのは大変です。

今まさに大変です。

13話にもなるんですね。

夕日

神は時に人に試練を与える事がある。

例えば、まだ恋仲ではない女の子とデートっぽい事をしていて楽しい雰囲気のままいよいよ終盤に差し掛かるうという時に、その女の子と二人観覧車に乗る事になった俺とかね。

ていつか今の俺ね！

一読された方々はそのどこが試練なのかと首を傾げるだろう。むしろときめきラッキーイベントだろリア充めがと怒りすら覚えるだろう。

その気持ち大いに分かる。

だが、それを重々承知の上でもう一度だけ例文の冒頭を読んでもらっていいだろうか。

『まだ恋仲ではない』

重要なのはここである。どんなに仲良く遊びまわろうが俺達二人は悲しきかな世間で言うところの彼氏彼女の関係ではないのだ。

しかも今回二人きりでの行動が実現したのは他ならない弟君の断腸の思いの譲歩があったからに他ならない。

だからこそ今回は清く二人の時間を楽しまねばならない。隙を見ていちゃついたらろかなんて魂胆はくそくらえだ。

だから俺は弟君の厚意を無駄にせず、純粹に楽しまねばならない。

と、ここで差し掛かりしは遊園地的な場所のシンボル観覧車約15分間を密室の空間で過ごすこのアトラクションは、恋人達の愛の囁かれる場所として古今東西を問わず大活躍をいまだ続けているだろう。

そんなところに俺は美鈴さんと二人で放り込まれ、はい手を出したら貴様の負けね。という状況。

試練だ、これを試練を言わない人間は今朝良くない物を食べたに違いない。うん、間違いない。

だが逆にこれほどの試練、無傷で乗り切れたならば俺は次の次元へステップアップできる気がする。そんな気がする。

俺は気負う。美鈴さんと乗る以前に若干高所恐怖症である俺は緊張していた。

そんな不必要なまでの重荷を勝手に自分に課している俺を美鈴さんは不思議そうな目で見ていた。

そんな二人の番が来た。

妙に笑顔な係員の案内で俺達二人は観覧車に乗り込む。

俺と美鈴さんは向かい合って座る。

がたんがたとゴンドラは少しづつ上へ昇っていく。

「……………」

俺はちらちらと周りの景色を見つつ美鈴さんを見る。

「……………緊張してるの?」

唐突に美鈴さんからのクエスチョン。

「へ?……………ど、どうして?」

俺は思わず素っ頓狂な声を出した事を少し恥じつつもそう返す。

「だって忙しく辺りを見ているから……………高所恐怖症?」

「ぐきっ」

何かが折れた音になってしまった。

俺は半ば凶星を指されたが、しかしここは慌てないのが肝要なり。

「えうと、いや、まあ確かに高い所は苦っ手っかなあ〜」

駄目だった。なんか変な口調になってしまった。声裏返りかけてたし。

「くすっ……………」

それを見た美鈴さんが口元をほころばせる。くそう、それ自体は大いに眼福だが経緯が気に食わん。

「なんか工藤くんって面白いね」

「うーむ、本人もうちよい格好良くいたいつもりなだけどねー」

と負け惜しみ。すると美鈴さんは首を振る。

「いや、別に格好良くなって面白いとかそういうこといってるんじゃないよ？なんていうか、工藤君、いつも自然体って感じがしてね。いいなって」

自然体。自分では全く意識したことすらなかったが、っていうかそれこそ自然体って訳か？

「それにいい人だもの。私みたいなのと一緒に嫌な顔一つせずに遊んで回ってくれるし」

「……そういう基準なら俺はまだいい人かどうか分からないな」

俺はわざとらしく含みを持たせた笑みを浮かべる。

「え……？」

美鈴さんはなんのことかとときよとん顔。

「俺は今日一日誰の為でもない自分が楽しみたいくて美鈴さんと一緒に遊んだの。だからそれで美鈴さんがどうこう感じる必要はないんだなこれが」

「そっ……か。ありがとう」

美鈴さんは、夕焼けの影響だろうか。頬が少し赤く染まったような顔でにこり微笑んだ。

俺はまたしても胸が飛び跳ねる。もう本日何回目か分からない。

同時に俺の心に湧き出る物があるが、俺はそれをぐっと抑え込む。

「……いや、いい景色だ」

俺は抑え込むついでに外の景色を眺める。

茜色に染まった海に太陽が沈んでいく様子はなかなか絶景であった。

しばらくは二人してその様子に釘付けになっていた。

そしてこういうときの15分とは恐るべき早さである。

俺達を乗せたゴンドラはあっという間に地上にたどり着いてしまったのである。

当初の試練の雰囲気はどこへやら。俺はただ美鈴さんと二人で過ごせる空間に大いに満足していた。

そしてその地に足着かぬ状態で、俺と美鈴さんは名残惜しくも別れの時を迎えようとしていた。

「また……」

いよいよお別れ、という時。美鈴さんは口を開く。

「また、どこか遊びに行きましようね」

美鈴さんのその言葉が、俺はただただ嬉しくて。大きく頷いていた。

おーっし！美鈴さんと遊びに行く大義名分を手に入れたぜい。

美鈴さんと別れた後、俺は小さくガッツポーズをしながら帰路に着こうとした。

その時、

「やつ、お疲れ」

雄大が現れた。

「ぶっも」

弟君も。

と言う事はつまり待てよ。これはもしやそついうことか！

「実に楽しげだったよね？」

雄大は何を思い出してかにやり。

「よし、とりあえずお前をぶん殴るとしよう」

「待ちなさい待ちなさい。暴力はいけないよ」

雄大は両手を挙げ俺の攻撃をかわす。

「くそ」

俺は棒読みで悔しがる。

「とまあね、柏木がお前に話したい事があるそうだからバトンタッチ」

雄大は最前線を退くかたちになる。

「……」

弟君は難しい顔のまま俺に向かい、

「今日はありがとうございました」

頭を下げる。

「俺は工藤さんがあんなに紳士的に振舞えるとは知りませんでした」

「君もいきなり失礼な事言うね」

俺が間髪入れずに突っ込むと、弟君は微笑む。ちくしょうイケメンだなちくしょう。

「そんな工藤さんに、姉の事で話しておきたい事があるんです」

そう言った時には弟君の表情は真面目なそれに変わっていた。

夕日（後書き）

今ピークです。

眠気の。

だからどうした。

では次回。

過去（前書き）

確実に話数が前作を越える勢いです。

どこまで伸びるかとやら。

ではどうせ。

過去

さてさて俺達3人は近場の喫茶店に落ち着いてござる。

丸いテーブルの様な独特な席についた俺達はまあとりあえずは飲み物を頼んだ。

場に妙な緊張感が生まれる。

弟君が俺に対し『姉の事で話したい事がある』という言葉が何度も俺の中で反芻される。

その時の真面目な眼差しを見れば、今からの話が軽い物ではないであろう事は容易に想像できた。

「さて……」

誰が最初に口を開いたか。それは意外、でもないか？な雄大であった。

「今日の一馬と美鈴さんの動向を、まあ趣味悪く観察させてもらったわけだけど……」

雄大は言いながら笑いを漏らす。その笑いが趣味悪そうだと思うがな。

「まあ普通に楽しそうだったよね。知らない立場だったらカップルって言われても疑いはしなかったね」

と、雄大はさらりと俺がにやついてしまいそんな事を口にする。

「柏木もそれを感じ取ったからこそ、こうして話をする機会を設けたんだよ」

雄大は俺と弟君の仲を取り持たんが如くの言葉。

「そうやって言ってくれるのは正直嬉しいが……。これから何を俺は話してもらえるの？まあ美鈴さんの事には違いないんだろっけどさ」

俺は弟君を取り巻く重い空気をひしひしと感じつつ疑問を口にする。

「それは……。ごめん、ココからは柏木の口から言っただほうが良いね」

雄大は気づいて弟君にその役割を譲る。

「……」

弟君はやはり重苦しい顔をしつつも、意を決したかのように言葉を紡ぎ始める。

「私の姉、柏木美鈴は2年近く前にある事件、の被害に遭ったんです」

「事件……？」

俺はその不穏な単語の出現に眉をしかめる。

「はい……。姉は、当時の学校の担任の男性教諭から、性的暴行を受けそうになつたんです」

弟君はそれこそ地獄の景色を思い出すかのような忌々しげな表情を浮かべる。

「……は？」

俺は弟君の言ってる事が余りに予想の外過ぎて、あほみたいな返しをしてしまつた。

「姉は、弟の僕が言うのもなんですが……一般的に言うところの『綺麗な女の子』のカテゴリの入っていてなんら不思議でない容姿の持ち主です」

「まあ……否定はすまい」

俺は弟君の言い方に引つかかる物を感じつつも頷く。綺麗なのは間違いない。

「そういう意味で高校に入学した当時から姉はかなりちやほやされていたようです。まあ、姉自身はとてマイペースな性格なのであまり気にはしなかつたようですが」

弟君は思い出すようにゆっくりと喋っていく。

曰く、容姿端麗な美鈴さんは学校でも評判だった。しかしその事をまるで気にしない美鈴さんの気さくな性格は同姓にも好まれて、瞬く間に友人達が増えていった。まあその友人達の中に美鈴さんを狙う野郎共は確実にいただろうがな。

美鈴さんはたくさんの友人に囲まれて楽しい学生生活をエンジョイ……するはずだった。

ある日の放課後、担任の男性教諭から教材を運ぶ手伝いを頼まれた美鈴は、その教師の依頼を快諾し、二人で荷物を運んでいた。

その教師は若くて真面目な教師で、生徒や同僚の先生方の人望も篤かった。

そんな真面目な教師と美鈴が歩いていても、すれ違った生徒などはまるで疑問を抱かなかった。

そんな二人が資料室に到着し、持ってきた教材をしまった時、カチヤリ、となぜかドアの鍵が閉まる音が聞こえた。

美鈴は振り返る。そこにいたのはおもむろに鍵に手を掛ける教師の姿。

美鈴には教師の行動の意味がまるで理解できなかった。

もつやることは終わったのになんでわざわざ鍵を閉める必要が……と。

そこから、悪夢は始まった。

ゆらり、振り返った教師の顔はいつもの爽やかな笑顔の欠片も無く、飢えた野獣という喻えがピタリとはまる、そんな顔をしていた。

美鈴は恐怖した。これはただごとではない、と。

逃げるべきだと本能が告げる。しかし足も腕も動かない。

教師はなにかぶつぶつと言葉を発しながら美鈴に迫る。

美鈴は叫ぶ事も出来ぬ程に身を固め、目には涙をためていた。

がしり、と教師の腕が美鈴の肩を掴む。

その時、美鈴の頭の中に、ある感情が生まれる。

『男の人、怖い』

肩を掴まれた美鈴はそのまま振り回されるように床に押し倒される。

なんでなのか、なんで普段はあんなに優しい先生がこんな乱暴な事をするのか？

美鈴は恐怖と混乱とが入り混じり混沌へと思考が沈んでいく。

鼻息も荒く血走った目で美鈴を舐め回すように見る教師。

『君は僕の物になるんだ』

そう呟き、そして美鈴の服に手を掛けて、無理矢理に脱がせようとして……。

ガンガンガンガン！！

資料室の扉が勢い良く叩かれる。

「せんせーい！扉鍵閉まつてるよー」

聞こえてくる生徒の声。

「ん？あれ、そんなはずはないんだが……。まあいい、今開けよう」

近くにいた教師が持っていた鍵で資料室の鍵を開け、中に入る。

そこで全ては終わった。

服装に乱れのある女生徒にまたがりその服に手を掛け、部屋に鍵すらかけたその教師の行動は、直ぐに白日の下に晒され、教師は懲戒免職となった。

そして美鈴は、そのときの精神的なショックにより男性と言つものが異常に苦手になってしまっていた。

過去（後書き）

ひどい奴もいたもんです。

では次回。

叔父（前書き）

もうすぐ1を超えますな。話数で。

でもまだまだ終わらない。

そんな15話です。

叔父

「……」

弟君の話は、俺の中に大きな感情を生む。

それが同情なのか、怒りなのか、悲しみなのか。

それともそのいずれとも違うのか。

ともかくにも弟君の話は続いた。

「姉はそれからというものの極端な対男性恐怖症になってしまいました。一時は私や父ですらまともに話せないくらいに」

弟君にとってそれは辛い過去であるのに違いないはずなのに、そうと感ぜさせない口調で淡々と続ける。

こいつは強いんだなあ、とそんな事を思っていた。

「姉が心に負った傷を治すにはとにかく時間をかけるしかない。そうして我々が長期戦を覚悟した時、あの人たちは現れました」

「あの人たち？って誰？」

俺は思わせぶりな言い方をされるその人物を問う。

「工藤先輩の良く知る人たちですよ。というか先輩のお祖父さんとお祖母さんですよ」

「…………ええ!？」

じいちゃんとはあちゃんが?なぜそこで登場するの?

「どこで姉の話を聞いたのかは分かりませんが、お二人は他のどの医者先生よりも長く、そして懸命に姉に付き添ってくれました」

あの二人が……………。うん、やりかねないかもしれないな、特にじいちゃん。

じいちゃんは近所で子供が転んで怪我したと知るや一目散に現場に向かい、しかし急ぐあまり自分が転んでもっとひどい怪我をして。しかしそんなの知らないと言わんばかりにじいちゃんは怪我をおして子供の下に駆けつけ治療を施したと言う。そして家に帰ってばあちゃんに怒られたと言う。

「その甲斐もあってか姉はなんとかこうして共学の高校に通える程度にまで回復しました」

「女子高に通うって手は考えなかったのかい？」

そうすれば男云々の事は考えなくていいはず。

「姉自身がそうしたいと言ったんです。我々は女子高に通う事も可能性に含んでたんですが」

まるで親みたいな口調だな弟君。

「そして今に至ると言うわけです」

「なるほどな。まさかうちのじじいばばが関わっていたとは……。あ、だから葬式の時美鈴さんがいたのか！」

全てがここに繋がった。

「ええ、お世話になった先生だからと姉は自発的に参列したのです」

「そしてそこで一馬が美鈴さんを目撃し、更に柏木との繋がりになったわけだな」

雄大は頷きながら言う。

「そして色々あつて今まさについてわけか。そう考えるとすごいな」

俺も納得の表情で頷く。

「工藤先輩……。どうか姉をよろしくお願いします」

弟君は真摯な目。

「よし、分かった」

俺はその目を真っ直ぐに見詰め返し、力強く頷く。

とつかあれだよな。今身内からのオツケーでたよな。な？どえらい進歩だぞこりゃあ。

俺は気持ちも新たに次なる行動に移る事にした。

弟君達と別れた後俺は父の弟で、祖父の診療所を継いだ叔父さんの元を訪れた。

叔父は以前は地域の総合病院に勤めており、祖父の診療所との連携も盛んに行われていた。

それは美鈴さんの時も当てはまる。

「婦女暴行未遂の女の子……。確かに覚えてるよ。父さんからの依頼で知ってる精神科医も紹介したしね」

叔父さんは突然やってきた俺を嫌な顔一つせずに迎え入れ、その当時の話までしてくれた。

「こういうのはあまり喋っちゃいけないのかもしれないけど……。彼女、血液型もとても珍しくてさ、そういう意味でも覚えてるけど……。なにより父さんがあんなに必死になってたのをよく覚えてるかな」

「じいちゃんが？」

「そう。父さんは元から患者に対して必要以上に世話を焼いていたからね。それにしてもあの子への情熱の注ぎ方は凄かったよ」

叔父さんはコーヒースプーンをすすりながら続ける。

「心に傷を負った女の子が二人にとってはよほど放って置けなかつたんだね」

「……傷か」

俺はポツリ呟く。美鈴さんが辛い目にあったのも事実、しかしそのお陰で美鈴さんと出会えたのも事実。俺は複雑な思いに捕まる。

「そついえば叔父さんってその事件そのものの事は知っているんですか？」

「ああ。そんなにでかでかと報道された訳じゃないが、患者の情報という意味で色々調べたよ」

そつ言つて叔父さんは当時の地方新聞の切り抜きを持ってきてくれる。

「と言つてもこの程度だけだね。ほら、これ」

俺は叔父の指差す記事を読む。

そこには確かに女子高生が教師に暴行を受けそうになったという内容が小さいながらも書かれていた。

「犯人の、その当時の教師の名前が特徴的だと思うよね。なんか北海道っぽい名前だった気がするけど」

叔父がそついうので俺は犯人の名前を探す。

するとそこには『釧路亮二』くしろりやうじと書かれていた。なるほど確かに北海道っぽい。

そつ思ったと同時に俺は何か心に引っかかる物を感じる。

俺はこの名前、知っている……？

いやいや、なんか有名な地名だからそんな感じがするだけだ。

うん。それだけ。

……。

だが、俺は『その事』を思い出した時、恐怖とも言つべき感情に襲われる事になる。

叔父（後書き）

物語が〜。

動くような〜。

動かないような〜。

……。

そんな次回。では。

電話（前書き）

最近めつきり涼しくなりました。

……。

めつきり、という単語に引っ掛かりを覚えた今日この頃。

16話にもなりました。

電話

俺は叔父さんの元を後にして、家路に就いた。

叔父さんは車で送ってくれと言ってくれたが、なんとなく考えながら、歩きながら帰りたいたいと思った俺はその申し出を丁重に断った。そんな帰り道。叔父さんから、せめて人通りの多い所を歩けよと言われたので、絶賛大通りを闊歩中。

とぼとぼと歩きながら、俺はさっきから心に引っ掛かる2つの事について考えていた。

1つは言わずもがな美鈴さんの事。もはやこれは考え事ではなく一種の恋煩いと呼ぶべきだろう。恥ずかしながら。

今日のデートでかなり距離は縮まった気はしていた。俺自身も気持ち固まってたのが更にガチガチになってるのを感じる。

『美鈴さんの事が本当に好きなんだな俺』という気持ちだ。

美鈴さんの事を考えるとそれだけで心がフワフワする。こそばゆくもどかしく切ない感じの気持ちになる。

……言おう。次にこうやって二人で会える機会があれば、っていうかそういう機会を無理矢理にでも作り、そして俺の気持ちを伝えよう。

そう決意するとあれだな。なんだか変な高揚感が胸に押し寄せるな。

緊張すら感じる。

でもこの気持ちは間違いなく本物なんだから自信を持って伝えよう。

うん。いいぞ俺！いざ美鈴さんの前で緊張して噛んだりすんなよ。

「……………考えるのも怖いなそれは」

好きでしゅ！とか言おうもんなら悶死だな。火噴きながら悶死。

とかなんとか考えながら俺は帰路を進む。

ドンッ。

多分俺自身もかなり浮ついていたんだろうな。向かいから歩いてきたおばさんに気づけずにぶつかってしまった。

「あ、すみません……………」

俺は軽く頭を下げたそのままその場を去ろうとして、

「あら、ちよっと」

とおばさんに呼び止められた。

え？何、怒られるの？とか思ったがそうではなかった。

「いれ、落としたわよ」

そう言って差し出されたおばさんの手には、俺の学生証が握られて

いた。

「え、あ……？す、すみません……」

うわあ、靴の隙間から落ちたらしい。と、俺は微妙に開いているチャックを恨めしげに睨む。まあ、どう考えても俺自身のせいなんだから。

俺が学生証を受け取ると今度から気をつけるのよ、とおばさんは去っていく。

そうだな。気を付けないとな。こんな落としたままにしたら下手するとえらいことになる。

と、俺は個人情報がつぷりと詰まった学生証を見る。

……ッ。

「ん？」

なにかが俺の中で引っかかる。さしてどうでいいような、しかし忘れてはならないような。そんななにかが。

俺はそんな心の違和感に居心地の悪さを感じつつ、歩を進める。

そうだ、確かあの時もこころへんだつた。

それは確実に家に、安心に近づくはずの道のり。

あの時は俺ではなく相手が落としたんだ。

だけど、今日この時は一步進む毎に不安が心に増していく。
相手は男で、珍しい名前で、どこかで聞いた事すらあると思った。

そしてその不安は徐々に俺にも分かるように形を成していく。

そう、あの時拾った免許証には、

その不安の中心に存在したのは、

『釧路亮一』

そつだ。そつ記されていた。

そしてその名前は俺の二つの記憶と完全に合致した。

俺の背中を悪寒が走り抜けていく。気持ちの悪い、人を焦らせるような寒さ。

俺は携帯の画面を見る。

美鈴さんと交わっていたメールは俺が送ってから返事がない。

内容は当たり障り無くしかし所々疑問符を配している。だが、そこそこの間を置いた今現在も返事はない。

待て待て待て。たかがメールだ。携帯に届き損ねている事だって考えられる。

そうだ、電話すればいい。

俺は電話帳機能から美鈴さんの番号を引っ張り出す。

で、美鈴さんが出たら、なんとなく声が聞きたくなくてー、とかそういう寒い台詞でも言えばいい。

「どわつと……！」

だが俺は焦っていたのだろう。携帯を道に落としてしまう。

「くっそ……。何やってんだ俺は」

俺は携帯を拾おうと手を伸ばす。

その瞬間、ブーン、と携帯が小刻みに震えだす。

着信だ。一体誰から……？

そう思い画面を見て、そこに表示された名前を見て、俺は息を呑む。

そして恐る恐る通話ボタンを押し、

「もしもし？」

と呼びかけた。

『もしもし、工藤先輩？』

相手は弟君だった。

「ああ、どうしたん？」

俺は聞いた。ある願いを込めて。今彼の口から絶対に聞きたくない
パターンの台詞があったから。

『実は……』

その台詞とは、

『姉がまだ帰ってないんですが何か御存知ですか？』

最悪のシナリオが幕を開けた。

電話（後書き）

パンはパンでも食べられるパンはなーんだ？

……。

恐らく不正解の方が難しいです。

では次回。

前編（前書き）

そろそろ佳境なんだと思います。

他人事です。

嘘です。

前編

「帰ってこないって……。連絡は取ってみたのか？」

俺は焦るな焦るなと自分の心に言い続ける。

まだ美鈴さんの身になにかがあったわけではないのだから……。

『ええ。携帯の方に何度か。メールもしました……。ということは工藤先輩もご存知ないって事なんですね』

弟君の声に明らかな落胆の色が混じる。

「残念ながら。俺もちよいと探してみる事にするよ」

『いいんですか？』

「いやいや、ここではいそぐですかと帰れるほど俺はマイホームマニアではないからね。ぜひ探させてもらうよ」

俺は努めて明るくそう言い放つ。

心には不安材料がうごめいているが今はそれぞれに繋がりはない。今弟君に話しても無用な心配を招くだけだ。

『それはよく分かりませんがとにかくお願いします。何かあれば私に連絡下さい』

「はいよ」

そうやって俺は電話を切った。

「…………ふう」

さあて、杞憂でありますように、てか！

俺は搜索を開始した。

といつても現状携帯による連絡が自事実上不可であることを考えると、ただ闇雲に走って探し回るのはあまりに非効率的に思えた。

「なにか手がかりが欲しいが…………」

俺は今までの記憶をフル回転させて美鈴さんを探せそうな場所を探す。

探す場所を探す…………不思議な感じだ。

「とにかく思いっくだけ行くしかないな」

俺はとにかく思いっついた場所に行く事にした。

今日美鈴さんと別れたのは学校からの帰路かなり近い場所。そこにヒントはあるはず。

そう考えた俺は、いつの間にやらある場所に辿り着いていた。

「……」

とある木の下。場所自体はどこにでもあるような取るに足らない場所だが、俺にとってはそうではなかった。

初めて美鈴さんと喋った場所。その時猫を助けようとしてハッスルした場所でもある。

猫を助けたいけどどうしたらいいのか分からない困った様子の美鈴さんを放つとけなくて、弟君の言葉を半ば無視する形で話しかけた。今思えばあの時の話しかけてっていう勇気のお陰で今日のデートにも繋がったんだよな。

それが今、こんな形でまた訪れる事になるとは。

「……いないか」

暗い夜の闇に包まれたその周辺は、人の姿はまるでなかった。

「ん？」

いつの間にやら、俺の足元にいつかの、というかあの時助けた子猫がいた。

「ニャー」

助けた時はそそくさと逃げられたが、なんだろう。前回の礼でもしにきたのだろうか？

「ニャーニャー」

と思っただらやたら鳴きながら俺の靴にしがみついてくる。

「なんだなんだどうしたって言うんだよ」

俺は唐突な子猫の手の平返しに戸惑っていた。

「ニャー」

と思っただら猫は俺の足元を離れ木の下の方に駆けて行く。

「予想を遥かに上回る気まぐれっぷりだなおい」

俺はそんなことを呟きながら猫の走って行く方を何気なく見る。

「……………」

そして見つけた。暗い地面になにか断続的に光る何かを。

「これは……………」

光を放つその正体に、俺は見覚えがあった。

俺は光を放つそれ、携帯電話を拾い上げる。

今日も何度か見た。

間違いなく美鈴さんの携帯だ。

なんでこんな場所に……。

俺の中の不安要素がざわつき始める。

俺はゆっくりと画面を開き、美鈴さんが落とす直前の様子を確認する。

「……」

電話帳から通話へ繋ぐ一歩手前の画面。表示されていた名前は、

「俺じゃねえかよ……」

一体美鈴さんが何を伝えようとしたのか。これだけでは分からない。しかしなぜか俺の心は絞り上げられるような苦しさ襲われる。

絶対に見つけねばならない。無事に。

俺は強く心に誓う。

その上で、俺は更にある物を発見する。

「猫缶？」

そう、猫の餌が入った缶詰が落ちていた。蓋は開き中身は散乱した状態で。

「……」

ちょっと気になった俺は携帯のライトでその散乱している様子を照らしてみる。

「……もしそうだとしたら」

俺はある可能性に気付いた。そして、現状唯一のその可能性に俺は
すぐることにした。

前編（後書き）

春巻き

腹巻

……。

なんでもないです。

では次回。

中編(前書き)

後書きに何か書きます。

あ、それはいつもと変わらないか。

じゃあいつもと違うこと書きます。

とりあえず本編どうぞ。

中編

彼との出会い。

最初の出会いから何か他の人とは違う何かを感じていた。

何がどうというわけではない。極めて抽象的で、かつ直感的な何かを。

そんな彼が猫を助けようとした時、木から落ちそうになった時、なんだか胸が締め上げられるような思いが私の中に生まれた。

長らく生まれる事のなかった思い。

私は戸惑った。私はその思いの扱い方を知らなかったから。

こんなにも楽しくて、切なくて、ドキドキする。

それは彼と一緒にいるとき、より強くなる。

ああ、これが恋なんだ。

年頃の女子高生には有り得ない気付きかもしれない。

でも、私にはそれがあつた。

遊びに行った先で二人になった時は本気で緊張した。だって何の前触れも無しに二人でって……。

私絶対に変な事するか喋るかしてたはず。もうなんか恥ずかしすぎる。

彼は優しいから何も言わなかったけど、絶対何か思われたはず。

今日の思い出は必要。でもそういう恥ずかしいのはいらぬ。うん、私内満場一致でいらぬ。

それにしても楽しい時間というのはあつたという間だった。

気付けば彼と別れの言葉を交わしていた。

惜しかった。出来ればもつと一緒にいたかった。

でもそれは口には出せなかった。私にはそんなことを言う勇氣などなかったから。

そうして彼と別れて一人家路を歩く。

今日一日の事を思うと自然と顔がにやけてきてしまう。

夜道をにやにやしながら歩く私。……うん、絶対に怪しい。ていうか怖い。

「あ

そんな中、私はあることを思い出す。

そして、帰り道とは別の方向へと向かう。

それは様々な思い出が詰まった場所。名も無き木の下。

あの人が猫を、今私の足元で猫缶にむしゃぶりついている子猫を助けてくれた場所。

私は浮かれついでにこ子の餌を忘れるところであった。

我が家は父が猫嫌いの為飼う事はもちろん家に近づける事さえ出来ない。

でも私は猫が好き。こんな風にわざわざ餌を与える事を苦に思わないくらい好き。

だから今日も今日とてその猫好きという気持ちに背中を押されるがままに餌をあげにきた。

ただ、それだけ。のはずだった。

でも、そこにその人は現れた。

私が最後に会った時より幾分か太ったか。しかし見間違えたりはない。

釧路、先生。

私の心をめちやくちやにかき乱してくれた人。

もう忘れてもいいんだと思っていた遠くて黒い記憶の中の人。

この人は私に近づいてはいけないという事になっていたはず。

なのになんで今私の前にいるのか。

私は声が出なかった。体も思うように動かなかった。

本当なら今すぐこの場を逃げ出すべきだろう。大声で助けを呼ぶべきだろう。

でもそれが出来なかった。

人が恐怖に支配された時ってというのはこういう瞬間を言うんだなと思った。

でもそんな暗闇の中で、残されたわずかな光を掴もうと、私の手は動いていた。

が、あの人が動き出し私に何か青白い光を発する物を当ててきた瞬間、意識が吹き飛んでしまった。

なん、で……。なの……。

次に私が目を覚ました時、私はどこかの建物の中にいた。

ぼんやりとした意識の中で、私は自分がどういう状態か段々と理解していく。

手足は縛られて横にされ、口も布のようなもので塞がれていた。

絵に描いたようなピンチ、まるで映画の人質にでもなったかのような
だった。

でも、実際の事態はそんな生やさしいものではなかった。

私が目覚めたのに気付いたあの人が、なにか私に向かい言ってくる。
しかし混乱している私の耳にはその言葉の意味を理解する余裕すら
ない。

あの人はこちらに向かってくる。ぶつぶつと何か、私にとって不吉
な事を言いながら。血走った目と荒い呼吸が更に恐怖を倍増させた。
助けて！と声にならない声で叫ぶ。

もしこれが映画であったなら、主人公が颯爽と駆けつけて悪人を倒
し、ヒーインを助けてハッピーエンドになるんだろう。

でも今私が直面しているのは紛れも無い現実。都合のいい物語の世
界ではない。

こんな夜のどことも分からぬ場所にいきなり助けが来るはずはない。しかもこんなタイミングで。

でも、そうと分かっているとしても、私は心の中に真つ先に浮かんだ彼に、助けを求めずにはいられなかった。

あの人が間近に迫る。

もうダメなのか。何も出来ず現実の中で私はまた心を、体をめっちゃにされなくてはいけないのか。

私は涙の滲んできた目をぎゅっと瞑る。そうして視界が閉ざされている間に、全てが終わって欲しい。せめてそれだけを願って。

だけどそんな私の願いはいつも簡単に打ち崩される。

そして私は知る。

この救いようのないはずの現実という世界にも、物語のような『何か』が起こる事はあると。

窓ガラスをぶち破りあの人に体当たりを決める彼の姿を見て私はそう思った。

中編（後書き）

『そしてそれは青春で』は、

4部作です。

つまり今4分の2です。

いつもと違うこと書いてみました。

では次回。

後編（前書き）

最初はグー。

……。

なんでグーなんだろう？

そんな後編です。

後編

俺は携帯を耳から離し見下ろしていた。

携帯を拾った木から少し離れた場所にプレハブ小屋があり、俺はそこを見下ろせる丘の上にいた。

足元を携帯のライトで照らすとわずかな油分のでかりが見える。あとキャットフード独特の匂い。

俺はこれらを頼りにこの場所に辿り着いた。

辺りを見回すと、ただでさえ暗いのに周りが木に囲まれしかも丘の下。事を起こすにはなんともおあつらえ向きな場所だ。

あのプレハブ小屋は付近の工事の事務所だったらしいが、工事自体が凍結して中止になったとかなんとかで小屋だけそのままにされたという経緯だったはず。

俺は携帯を懐にしまい、丘を下る為一步踏み出す。

もし美鈴さんがあの中に捕われているとしたら一刻も早く突入すべきである。

何かあってからでは遅いのだ。だから俺は力強くその一步を……、
ずる。

「えっ？」

踏み外した。

そして態勢を立て直そうと体が前屈みになり、それが結果として俺の体を止めようのないスピードの世界へといざなってくれる結果となった。

「うおおおおおおおおお！！」

俺は小屋を目の前にしてもまったくスピードを緩められず、果たして小屋の窓ガラスを目の前にして、覚悟を決めた。

俺の中に高らかに『突撃』の号令が下る。

そして腕で顔をかばいつつ俺の体は小屋の中に勢い良く侵入し、そして早速なにかにぶつかった。

「がべふっ！」

俺はそのぶつかったなにかを勢い良く押し飛ばし、自らはそれを利用し勢いをなんとか殺し止まる。

「あいつっ……」

頬や手にちくちくとした痛み。ガラスの破片が刺さったようだ。

といつか俺はなににぶつかったんだ？ともすれば人のような柔らかさだったが……。

「……っ！」

すぐそばからなにやら呻く様な声。なにかいるのか？

「っつて、美鈴さん！」

そこにいたのは手足と口を縛られた美鈴さんの姿であった。

「大丈夫か？今自由にしたる」

俺はきつく結ばれた縄を解いていく。

「ぶはっ……。工藤君……。どうして？」

美鈴さんは困惑の表情で俺を見詰める。そんな美鈴さんに対し俺はにっかと笑顔で、

「美鈴さんのピンチとあらばいつだって駆けつける。俺はそういう男さ」

言ってから気付く。全く答えになってない。

「さ、もう大丈夫だよ」

俺は美鈴さんを縛っていた縄を全て解く。そしてさあ脱出だと言う矢先、俺達の背後でゆらりと動く影が一つ。

「はあっ……。はあっ……。！」

荒い呼吸に血走った目。不気味さすら感じるその男が誰なのか、俺はすぐに分かった。

釧路亮二。いや、名前なんかどうでもいいか。大事な事実の一つ。

こいつが美鈴さんの心を傷つけたクズ野郎ってだけの話だ。

「なんだお前は……邪魔をするな！」

釧路は一線を越えた怒りの目で俺を見る。

「邪魔って何のことだよ？今から女の子を力づくでどうこうしようって事か下衆野郎」

俺は相手の雰囲気巻き込まれては駄目だと強気に声を張る。

「工藤君……」

怯えきつた美鈴さんの表情。

「大丈夫。ただし俺の後ろから離れるなよ」

俺は努めて優しい口調で言う。

「下衆……だと。違う！違う！俺はただその子の事が好きただけだ！それだけだ！」

釧路は叫ぶ。

「好きな女縛り上げるかよ、普通！」

「違う！俺は悪くない。悪いのはそっちだ。俺はずっと見ていたの

「うるさい！お前みたいな奴になにが分かるっていうんだ！消えろ、今すぐ消えろ！」

釧路はポケットからナイフを取り出す。刃渡りは15センチ程。俺の背筋を寒いものが駆け抜ける。

「殺してやる。殺してやる」

釧路はナイフの切っ先を俺に向け、向かってくる。

怖い。怖くて仕方ない。

だが、

俺は守ると決めたんだ！

一歩大きく踏み込んだ俺の顔にナイフが

じゅっ。

と焼けるような痛みが頬に広がる。

だがその程度、

「ううああああああ！！！！！！」

俺は大きく振りかぶった拳を釧路の顔面に叩き込んだ。

奴の体は大きく後ろに仰け反り、倒れる。

「はあ……はあ……」

俺は大きく肩で息をする。

「この、野郎……」

釧路がよろよろと立ち上がる。手にはナイフを握り締めたまま。

「殺す……!!」

そしてナイフを持った手を大きく振り上げた。

「させないわよ!」

突如小屋の中に凜とした声が響き、釧路の腕が何者かに捕まれたかと思いきや、ぐるんと体ごと回転し、地面に叩き付けられる。

「釧路亮二、拉致監禁及び傷害の現行犯で逮捕する」

かちやり、と釧路の手に掛けられる手錠。

俺はその様子を見て、

「早かったじゃん。姉貴」

と手錠を掛けた刑事殿に声を掛けた。

「何言ってるのよ。いきなり電話してきたかと思えば場所だけ告げて早く来いって……姉をなんだと思ってるのよ?」

そう言っつて我が姉、椎葉はため息をつく。

「でもま、間に合っつて本当良かったわ」

姉貴は抵抗する釧路を締め上げながら安堵の顔で言っつ。なかなかシユールな光景だ。

「ああ、助かった」

俺は後ろで固まっつている美鈴さんを見る。

「ほら、もう本当に大丈夫だよ。あいつは捕まっつたから」

俺がそう言っつと、固まっつたままの美鈴さんの表情が……。

「……………うっ」

目尻に光る物が溜まっつていく。そしてそれはやがて目からあふれ出していく。

「う、うああああっ！こ、怖かっつたっ！」

「よしよし、もう大丈夫だから」

俺は美鈴さんの体を優しく抱きしめる。

「工藤くんが死んだらいやだっつて思っつたらっつ、苦しくてっつ」

「お、俺のことかい？」

「よかったっ！よかったよお！」

美鈴さんは俺にしがみつきながらおんおん泣き続ける。

「これはあれね。空気呼んで退散するわ」

姉貴は釧路を引きずりながら小屋を出て行く。

「あっははは……」

俺はなんだか分からないが、とりあえず笑う事にした。

美鈴さんが無事で、俺も無事。

それがとても嬉しかったから。

後編（後書き）

最初はチヨキ！

……。

言いづらいな。

では次回。

抱擁（前書き）

めっきり秋です。

もう少ししたら、

めっきり冬ですな。

さあ、本編ですぞ。

抱擁

「いっつっ……」

俺は頬の傷に消毒液が染みて思わず声が漏れる。

「我慢してね。ほっといたら大変な事になっちゃうから」

美鈴さんはそう言いながらぼんぼんと消毒液の染みたガーゼを頬の傷に当ててくる。

あの釧路を我が拳と国家権力で封じた後、俺達はおじさんのクリニックにいた。

姉貴がおじさんに連絡を取ってくれておじさんが車を出してくれたのだ。

姉貴はとりあえず面倒な事は任せておきなさいと釧路を締め上げながら言ってくれた。

恐らくあの姉貴に任せておけば必要以上にあのくそ野郎に鉄槌を下してくれるはず。それに期待。

まあ、どちらにしるあいつの脅威はギリギリ去った。手放して喜んでいい終わり方かは分からないが、当面は美鈴さんが身の危険を感じなくていいはず。

しかしそれは俺の安心であって美鈴さんの安心ではない。

美鈴さんはかつて心の傷を付けられた張本人にその傷をえぐられたのだ。何も思うことが無い訳はなかるう。

だが今日の前にいる美鈴さんはそんなことは微塵も感じさせずに、いつもの美鈴さんな感じで俺の前にいる。

「美鈴さんって強いんだな」

そして気付いたらそんなことを口に出していた。

「え?」

言葉通りに?マークを頭上に浮かべる美鈴さん。

「いやっ……。なんというかさ、ああいうことのある後なのにこうやっていつも通りに振舞ってさ……。なかなか出来ない事だと思っ
てさ」

俺は考えながら言葉を紡ぐ。そんなスローペースな俺の言葉に美鈴さんは優しく微笑みを浮かべ、

「だとしたら工藤君のお陰だよな」

と言った。

「へ?」

思わず素っ頓狂な声を上げて美鈴さんの顔を見る俺。美鈴さんの目は真っ直ぐにこちらを見詰めてきて、一瞬圧されるくらいに鼓動が跳ねる。

「私だつて泣きたいくらいに怖かった。声が出ないほどに怯えていた。多分あのままだつたら自分だけではないにも出来なかつたはず。でも工藤君が助けに来てくれたから、こうしていられるの。……ありがとう」

俺にどれだけの力があるのか。それは俺自身はよく分かっていない。だが、こうして好きな女の子一人笑顔に出来るくらいの力があるのだらうと考えると、俺もなかなか捨てたものじゃないな、と俺は俺を褒める。よくやった。

「どういたしまして……。なんかそう言われると照れくさいな……でも、嬉しい」

その時、わずかにだが互いの手が触れる。はつとして手を引っ込めようとするが、美鈴さんの柔らかな手が逃がすまいと俺の手をふわり包む。

さっきとはまた別の意味で鼓動が跳ね上がる。

俺の視線は美鈴さんの手から美鈴さんの意志を確かめるべく顔へと移動する。

そして視線が移動しきつた時、俺の視線はかちりと美鈴さんのそれと重なる。

だがそれも一瞬。美鈴さんは体ごと俺の方へと身を寄せてくる。

美鈴さんの体の感触が、髪の毛の匂いが、いざ目の前に迫り俺はどぎま

ぎのピークを迎える。

だが男なら、好きな女の事をこういつとときに受け止めずしてなんとする。

そつだその通りだ。と俺は空いてる方の手で美鈴さんの体を引き寄せる。というか抱き寄せる。

美鈴さんは黙って俺の腕に力が込められるままに俺と密着する。

果たして今この状態はなんと呼べばいいのだろうか？

恋人ではないだろう。かといって友達、というにはそのラインは越えてるって言っていていいんじゃないかな。

じゃあ、今の我々は？……なんて一瞬は考えもしたが、すぐにそんな野暮つたい思考は捨てる。

今日の前に美鈴さんがいて、俺が抱きしめている。それでいいではないか。今この時点で一体何を望もうというのだ？

まあ、答えは俺自身が一番良く分かっている。

回りくどく言っても仕方ないのでずばり言えば、それは美鈴さんとの『恋人』という確かな関係だろう。

今はこんな感じだがまだ俺は告白をしていないから恋人ではない。

でも焦る事はないだろう。これから時間はいくらでも

「好き、です」

あ…………る…………。

「え？」

「私は、工藤君の事が、好きなんです……………！」

抱擁（後書き）

美鈴さんの髪はさらさらとしつつふわっとしてると思います。

うむ。

では次回。

桜花（前書き）

最終回です。

泣いても爆笑しても最終回です。

爆笑はしないか。

桜花

現状を整理。

俺と美鈴さんはおじさんのクリニックの一室で手当てをしていた。

そうしたらなんだかいい雰囲気になって、

で、美鈴さんから「好き」って言われた。

そして今に至る。

美鈴さんはかなりの勇気を振り絞ってくれたのだろうか。真っ赤な顔で潤んだ瞳で俺を見詰めてくる。

その瞳に吸い込まれそうとはこういう時に使うのかもしれないな。

とかくだらない事を考えている場合ではないな。

美鈴さんが俺に男女としての好意の告白してくれた。

その背景にどんな心の動きがあったのかは分からない。

そして今の俺に必要なのは「なぜ？」ではない。そんなものは後で時間のある時にでもゆっくり考えればいい。

今の俺に必要なのはなんだ。その答えはとっくに分かっているはずだからさあ口に出すんだ俺。

「俺も……」

俺は告白の返事であるにも関わらず喉がカラカラに渴いているのを感じる。

これじゃあ自分から告白とかしようものなら渴いてするめみたいになっってしまうんじゃないか。

……だからそんな下らない事を考えている場合ではないだろう！さあ、俺。最も大事な部分を言おうか。

というなんとも俺らしい心の中のアレやコレや。でもそれが俺。なんにも飾らない工藤一馬なのです。

「俺も……美鈴さんの事が好きです。なんかもう、初めて会ったときから」

俺は美鈴さんの目を見ながらはつきりと答えを返す。

俺の答えを聞いた美鈴さんの顔がパアツと明るくなる。

「ほ、本当……?」

「ああ、なんなら俺から告白する機会を窺ってたくらいだから。まあ、先を越されてしまったけどね」

いい意味で。もう一度言おう。いい意味で。

「という訳で俺たちは両想い。晴れて彼氏彼女の関係ってわけだ、ね」

俺は少し冗談めかして言う。が、美鈴さんは満面の笑みで俺の胸に顔を埋めてくる。

「嬉しい……」

俺は美鈴さんを優しく抱きしめる。

幸せ。その言葉が俺の中にじんわりと広がっていく。

「私ね……。少し前までこうやって男の人に触れるなんて出来なかったの」

美鈴さんはぽつりとそんな切り出しで話を始める。

「男の人とはただ話すのも苦手だったりしてさ。……でもなんでか分からないけど工藤君は平気だった。ねえ、あの猫を助けたときの事覚えてる？」

「もちろん」

忘れる訳が無い。美鈴さんと初めて話した日だ。

「あの時木から落ちた工藤君に無意識に駆け寄った自分がいてさ。その時は無我夢中だったし特に嫌な気分とか考えてる暇も無くてさ。でも落ち着いてからその時の事考えても別になんとも思わなくてね。それがきっかけだったんだなあって思うの」

美鈴さんは上目遣いに俺を見詰めてくる。

「それから工藤君のことが気になりだしてね。いつの間にか好きになつてた……。一目惚れといえば一目惚れかもね」

美鈴さんの体が俺の腕の中に収まっていて、なおかつ互いの息がかかる程に顔が近い。

美鈴さんも同じ事を考えているのだろうか。頬を赤く染めつつゆっくりと目を閉じる。

「……………」

何も考える必要はないだろう。

俺はゆっくりと美鈴さんの唇に自分の唇を

「もう終わったかい？」

「ひゃおう!?!?」

部屋の外からノックの音と共におじさんの声。

俺たちは反射的に体を離す。実に悔しい瞬間だ。

「……………?おーい。手当てはもう済んだかい？」

「は、はい……………」

手当ては終わったよ。でもなにかが新しく始まりそうだったんだよ。何かが……。

「柏木さんのお父さんがお迎えに来たから」

「だ、そうだよ」

「う、うん……」

美鈴さんは明らかに戸惑った顔。

それはあれかい。俺となにがしかが出来なかったから？

だとしたら嬉しい。

とりあえずいつまでも待たせる訳にはいかない。俺は立ち上がりドアを開けるべくそのノブに手を掛ける。

「工藤君」

「ん……っ」

振り向いたその瞬間、俺と美鈴さんの先程触れ損ねたその温もりが唐突に訪れる。

どこが触れたか？唇に決まってるだろうがキスだよこの野郎。

しばし呆然とする俺に対し、美鈴さんは満面の笑みで言うのであった。

「えへへ、サプライズだよ」

……………そして日付は進む。

俺と美鈴さんが付き合い始めた事はなにはともあれ弟くんにもまず報告した。もちろん二人揃って。

弟君は内心は複雑なのだろうが、俺たちの門出に祝福の言葉を添えてくれた。

だがその後俺の携帯に、

『姉に悲しみの涙を流させたら惨殺したうえで爆殺しますから』

というメールがきた。

弟くんなりに美鈴さんの為に全力を尽くしてほしいという願いの表れ、と前向きに受け取る事にした。

前向きって大事。

そんな弟君の応援のお陰か俺達はその後も順調に交際を続けた。

下らない事で笑いあったり、

下らない事で喧嘩したり、

どこにでもいるカップルとなんら変わらない、平凡でしかしとても貴重な『青春』を過ごした。

そして季節は巡り、桜の咲き誇る春。

俺と美鈴は二人で近所の桜並木を散歩していた。

「きれいだね……」

「ああ……」

二人手を繋ぎゆっくりと歩く。

「あ、こら！爪を立てるな！」

俺は頭に遠慮なく乗っている猫に言う。が猫の方は我関せず、だらんとしていた。

「あはは、なめられちゃってるね」

「くそう。誰があの時助けてやったと思ってるんだ」

「じゃー」

「そんな昔の事を引き合いに出すとは器が小さいじゃー。って言うてるね」

美鈴がくすくす笑う。

「ん？というか美鈴もそう思ってるってことかい？」

俺がそう言つと、

「ぎくっ」

と擬音を口にして目を逸らす。

「い、いやだなあ。そんなこと思ってないよ？」

「じゃあ目を合わさんかい」

「え、えーつと……。あ！ほら見て、あの木」

話を逸らされた。とも思ったが、俺もその木を目にして動きが止まってしまう。

見事な桜の木。そしてここは俺と美鈴にとって思い出の場所。始まりの地。

「じゃー」

「おうおう。お前の事も忘れてないぞー」

そして俺と美鈴を見事引き合わせ、色々活躍してくれた猫とも出会った場所。

俺と美鈴は木の下に立ち、その見事なピンク色の空を眺める。

「……ねえ」

「ん？」

美鈴は繋いだ手に少しだけ力を込めながら、言葉を紡ぐ。

「また来年も見にきたいね」

それは期待か不安か。多分もどちらも混じった言葉だろう。

「……なーに言ってるの」

だから俺は言っちゃった。

「この桜が枯れるまで通い詰めるから覚悟しとけよ」

それは何十年先の話になるか分からない。分からないのなら、俺達のやるべきことはただ一つ。

真実が分かるまで何十年でも一緒にいればいってだけのこと。

「……うん」

美鈴はそっと俺に身を寄せてくる。

幸せな温もりを全身に感じながら、俺はこの桜にある事をお願いした。

この先、どのくらいの間あなたの前にこうして二人で来られるか分からない。

だけでも、どんな困難にも打ち勝って、二人で笑顔であなたに会いに来る。

だからあなたも毎年綺麗な桜見せてくださいな。

なんて、一方的なお願いを。

「なあ、美鈴」

「うん？なあに」

風が吹き、桜の花びらが舞い踊る。

それは、まるで俺達を祝福するかのようで。

「俺は今、最高に幸せだ」

桜花（後書き）

2の次は3です。

ということは3がいつか始まるということなのです。

恐ろしい話です。

ではその時がきたらまたお会いしましょう。

ではでは。

付録（前書き）

おまけです。

それ以上でもそれ以下でもないです。

どうぞ。

付録

一面緑に染まった風景を窓外に収めながら、電車は進む。

秋島が企画した映画撮影からの帰りの電車。

俺はぼんやりと窓の外を眺めていた。

次の乗換えまで一時間以上ある。

失恋の痛みを薄める時間にはちと短いが、しかしこうして外の景色を眺めているだけでも大分違う。

高柳浩輔。素直に負けを認めるのは俺の誇り的な何かが許さないが、しかしあの男なら二条深雪を幸せにすることだろう。

とは思いつつも悔しいものは悔しいので悔し紛れに奴に向けた『リア充爆発しろ』的な手紙を残しておいたが、まああいつなら冗談だと分かった上でうまく処理してくれるさ。

「……………」

俺はふと鞆に手を伸ばし、中から一枚のはがきを取り出す。

そこには、『結婚記念パーティのお知らせ』と書かれていた。

誰と誰の結婚式か？そんなもの言うまでもないだろう。

俺の視線はその二人の名前に目を落とす。

『工藤一馬&柏木美鈴』

順調すぎる交際期間を経た二人は、ついに結婚へと踏み切った。

ちなみにプロポーズは一馬さんからしたらしい。

「……………」

俺はひとしきりそのはがきを見て、再び鞆にそれをしまっ。

「ふう……………」

俺は目を閉じて眠る体勢に入る。

今は何も考えず眠りたい気分だ。

今眠ったら昔の夢でも見そうだけどな。

そうして俺は意識の奈落へと落ちていく。

そうして睡眠がいよいよ深いところへと進もうという頃だった。

「ねえ、お兄さん」

俺を呼ぶ何者かの声。

「ねえ！お兄さんってば！」

段々語気が強まるその声に、俺はまぶたを開く。

そこには、高校生くらいの女の子が俺の顔を覗き込むように立っていた。

「あ、起きた！」

女の子はさらさらした黒髪を揺らしながらにはあ、と笑顔。

対する俺はぼかん。ひたすらぼかん。

「……………誰？」

t o b e c o n t i n u e d ……？

付録（後書き）

柏木鷺君的一幕でした。

彼の物語はどこかで語られるかもしれませんが。

では次作で会いましょう。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4307v/>

そしてそれは青春で2

2011年10月20日02時03分発行